

2018



フィリピン訪問プログラム  
報告書

## 目次

[フィリピン論文] 2年女子.....	2
[10年越しにフィリピンに帰ってきて感じたこと] 2年女子.....	9
[私の使命] 3年男子.....	14
[フィリピン報告書 2018] 3年男子.....	19
[フィリピン訪問プログラム] 3年女子.....	24
[フィリピン訪問プログラム報告書] 3年女子.....	29
[フィリピンプログラム報告書] 3年女子.....	34
[大きな政府と小さなセンターのどちらが住民のためになっているのか] 3年男子.....	38





2年女子

### はじめに

みなさんは“貧困”という現実をどのようなものとして考えているだろうか。私がこのフィリピンプログラムに興味を持ったのは中学二年生の時のことで、私の尊敬する担任の英語科の先生が、青年海外協力隊として発展途上国に足を運び、現地の学校の先生を育成するための先生をしていた経験を授業などで話し、伝えてくれたことから始まる。

私はこのプログラムに参加する前“貧困”というものを、「住むところがない、ご飯が十分に食べられない、着るものも不十分で元気がなく、常に生存の危機と隣合わせのような状態」を想像していた。

しかしそれは違う。もちろん食べ物や住む家に困っている人は大勢いるが、子供たちはみな生きる力にみなぎっている。しかし、確かにそこに“貧困”は存在している。私はこの現状を一人でも多くの人に知ってもらいたい。そしてこの想いを伝えたい。

### 同じ貧困ではない

私たちはこの一週間で三つのセンターを訪問した。センターとは何かというと、学校とは別の地域の支援センターのことで、子供たちに効果的な支援をするために大きな役割を担っている。例えば、ただ支援金を渡しているのではなく子供の保護や、補食プログラムに健康診断、バリューフォーメーションと呼ばれる自分に自信をつける自己啓発活動、さらには子供の親など家族全員での生活改善を目指している。この六日間で私たちが足を踏み入れ、肌で体感した三つのセンターはそれぞれ違った貧困を抱えていた。

一つ目のセンターはイロイロにあるセンター41。宿泊していたホテルのあるイロイロ州都から、一時間ほど車に揺られて着いたこのセンターでまず衝撃を受けたのは、子供たちが活気に満ち溢れていたということだ。事前学習で貧困について勉強をしっかりとっていったこともあって、私のイメージとはかけ離れた子供たちであった。

そんな子供たちの第一印象は「全然貧困じゃない」というものだった。披露してくれたダンスもたくさん準備してくれていて、私たちと同じようなスニーカーを履いていた。仲良くなった子供たちは K-POP が大好きで、中には「私は AKB48 が好きなんだ」と話してくれる子もいた。

しかし家を訪問した時に、元気な子供たちの現実の暮らしを目の当たりにした。この地域はほとんどの人が小作人で、都市部にすむ地主に小作料を払って生活している。訪問した家では、広大な田んぼや草原

に牛や鳥が放し飼いにされていて、とたん屋根の小さな部屋には私が確認できただけで六人の子供たちがいた。

労働力が足りないため、子供をどんどん産んでいるのだと思うが、子供が増え、たくさんのもが必要になるというその状況が、かえって貧困を加速させているように思えた。

この家は、年にお米を三回収穫し、年間 20%の小作料を地主に払って、生計を立てている。その周辺の街並みを眺めると地主と小作人の家の違いは歴然としていた。大きさも華やかさも、すごく差があり、ぱっと見でこの人は地主だとわかるほどであった。

この地域の人々は食べるものには困ってはいないが、少ない収入で家族全員三食食べていくのがやっという生活をしている。そのため、家族の誰かが病気になったり、怪我でもすれば家族全員が窮地に立たされるといことは容易に想像できた。この地域は農村部の中で地主と小作人との格差が激しい貧困であった。

二つ目のセンターは、イロイロから船に乗って向かうギマラス島にあるセンター30。誰もがギマラスを大好きになる魔法にかけられるという、とても魅力的な島であった。

この土地は本当に自然が豊かで、見渡す限りのマンゴーやココナッツやバナナの木があった。船から降りたとき、センターの子供たちが私たちのほうに駆け寄って、貝殻でできたネックレスを首にかけてくれ、歓迎してくれたのがとても嬉しかった。

そこで私は Florence という女の子に出会った。彼女は勉強をすることが好きで、今は大学に進学することを目標に日々勉強に励んでいるそうだ。将来は数学の先生になりたいんだと目をキラキラさせて話してくれた。

彼女の学校はとてもきれいで、広大な芝生が広がる校庭があった。その学校の中高生は私たちに「こんにちは」「おはよう」「あけましておめでとう」とあいさつをしてくれた。この時期に「あけましておめでとう」という挨拶は適切であるとは言えないが、日本人がくるということを知り、日本語を勉強して覚えてくれていたことがひしひしと伝わり、心が温かくなった。ギマラスを好きになる魔法はこのように、人々の相手を思う心に私たちの心が動かされるから、この島が大好きになるのだと思った。

そこから、Florence と学校のことや家族の話しながらジプニーというバスのようなものに揺られて山奥にあるセンターに向かった。到着すると、みんなが歓迎してくれて、おいしい料理をふるまってくれた。

そこで私は中学生の仲良し六人グループに会った。彼女たちは「Chisa!」と私の名前を呼んでくれたが、私が手を振って「Hello」というと恥ずかしそうに六人で目配せをして、誰が話しかける？と話し合いをしていた。そして彼女たちの話し合いの末、六人のうちの一人が「I love you って日本語でなんて言うの？」と私に聞いた。「あいしてるだよ」と教えてあげると、向こうでバスケットボールをしている男の子と仲良し六人組の女の子のうちの一人を交互に見て「あいしてる」と言い、冷やかしていた。

これを見て私は、たとえ住む場所が遠く離れていても、全く違う生活を送っていても考えることは好きな男の子の話であったり、ベースや基盤となるものは私たちと同じなのだと感じた。

しかし、たとえ同じように見えても、彼女たちのバックグラウンドは私たちとはかけ離れている。

この地域の住民の 40%は土地を借りてバナナや米をつくり、家畜を飼い、それを自分たちのマーケットで売ることによって収入を得て生活をしている。住民自らで経済が循環し、自給自足が確立しているのだ。

家を訪問してもその生活は私たちとはまるで真逆で、自然と共に生きるというのはこういうことなのだ

と考えさせられる部分がたくさんあった。

この島は豊かな自然に囲まれており、一見幸せそうに見えるし、確かに住民同士の共助はある。しかし全員がほとんど貧困ラインを下回っていた地域であった。

三日目は、ダスマリニャスというスラム街にあるセンター35を訪れた。

このセンターは私が一番衝撃を受けた場所であり、この六日間で最も記憶が鮮明に蘇る場所である。このダスマリニャスに着いて、まず一番に驚いたのは子供たちの活気に満ちた雰囲気であった。

センターから子供たちの家に向かう途中、昨日まで訪問していたイロイロやギマラスと全く違う都会の風景に圧倒されている私に、一番に話しかけてくれたのは Steve という十四歳の背の高い男の子だった。彼はとても明るくて面白く、「こんにちは、僕はみんなにクレイジーって言われるんだよね」と溢れんばかりの笑顔でなぜか自慢げに話しかけてくれた。いきなりの出来事に少し動揺したが、彼の話をもっと聞きたい！と思い、いろんなことを話すうちに、センターから彼らの学校に着くまで10分もないような短い時間で私たちはすぐに仲良しになった。

もし日本人同士だったら、こんなにすぐに仲良くなることは難しいし、初対面の人に自分の名前よりも先にみんなから「クレイジーだ」と言われることを教えてくれることもないだろう。

そのため、今まで私がイメージしていた暗くて、活力のないスラム街の人々とは真逆の Steve にとっても驚かされたし、自然と緊張がほぐれた。

家庭訪問の時、彼は私に「早く自分の家を見せたい！」ととても張り切っていた。決して裕福な暮らしではないだろうということは想像できたが、自分の家を見せることを恥ずかしがったり隠すことなく、なんでもさらけ出すことのできる彼が私には持っていないものを持っているようで、うらやましかった。

しかし、彼の家があるスラム街に足を踏み入れた瞬間に私は大きな衝撃をうけ、Steve との楽しいおしゃべりも上の空になるほど啞然としてしまった。

道の隅に寄せてはあるものの、道のほとんどを占領しているごみの山、硬いコンクリートを素足で走り回る子供たち、ブーンという無数のハエの音、鼻について離れない下水道の匂い、彼らの姿からは見えもしなかった彼らの生活背景は、私たちがスラム街と言われてイメージする教科書の世界そのものであった。

また、スラムに住む人々は私の一人部屋より一回り小さいような部屋で、そこに七、八人で生活をしている。ベッドが置いてあっても十分に睡眠がとれるような柔らかいマットレスはなく、木の板にブランケットくらいの薄い布が一枚引いてあるだけであった。一緒に家を見ていた先生は、「何か質問があったら聞いたら？」と言ってくれたが、私はこの目の当たりにしている状況が信じられず、質問よりも自分の頭の中で現実を処理すらできていない状態だった。

さらに、Steve とのおしゃべりで、スラム街の人々の生活はよりはっきりと浮かび上がってきた。

彼の父は無職で、たまにマニラに出向いて日雇い労働をしているそうだ。それ以外に家族の収入はないので、料理が得意な母は毎朝スラム街の人にスパゲッティを振舞うことでささいな収入を得ている。その影響もあるのか、Steve の夢はコックさんになることで、彼は将来マニラや海外で働きたいと思っている。彼の兄は軍隊に入っていて、弟も軍隊に入りたいと思っているそうだ。このようなことから分かるように、この地域は都市部から追いやられてしまった貧困なのであった。

発展とこれからの暮らし

私は、このフィリピン訪問プログラムに来るにあたって、前もっていくつかの聞きたい質問を考えて準備しておき、センターのスタッフや子供たちに質問をした。

たくさんの質問や、子供たちとの交流を深める会話の中で一番深く考えさせられたのは、「この地域に大きなビルとかが建って発展してほしいと思いますか？」という質問だった。

中でも、ギマラスの5人に聞いたことが最も印象に残っている。私は、センターのスタッフ3人と、センター長の Dr.Lee、高校生の Florence 計5人にその質問をした。センターのスタッフの一人と Florence は「もっと発展してほしい」と答え、残りの3人は「発展してほしくない」と答えた。発展を望まないほうの考えとしては、この自然あふれるギマラスを維持したい、子供たちにコンクリートや土の上ではなく草の上で走り回ってもらいたい、住民がお互いに支えあい共に生きているこの暮らしを守りたいという意見だった。発展を望むほうの考えとして、Florence の意見はギマラスには働く場所がないため、必死に勉強しても学校の先生くらいしかなれないから、働く場所を作るためにも発展してほしいということだった。

センターの人も、Florence とほとんど同じ意見だった。彼女はセンターの子供たちが大好きだから、その子供たちが高校や大学卒業後、仕事を求めてマニラなどの都心に出て、その土地で結婚しこのギマラスから離れてしまうことをさびしく思っていた。そのため、「この土地が発展してギマラスの中で仕事をし、働きながら生活できる環境になればなんて素敵だろう」と話してくれた。

このことは、日本でも言えることだと思う。地方から都心に若者が流れ、地方の過疎化が進み高齢化してしまうというように、国が抱える問題は日本とも共通している部分が多くあるんだなと思った。

両方の意見を聞いて、私が思うことは「このギマラスを守りたい」ということだ。しかし現在、フィリピンの国家経済開発庁（NEDA）は、西ビサヤ地方のパナイ島、ネグロス島、ギマラス島の三島を結ぶ橋を建設する 270 億ペソ（約 590 億円）規模の大型プロジェクトを、現政権中に実施する計画を立てている。

ギマラスの住民にとって、船に乗らずともほかの島に行けるし一見いいことばかりに思えるが、私はいいことばかりではないと思う。

今から話すことはあくまで、私たちが話し合いをしたことであり私の予想だが、橋が架かることによって今の自然豊かなギマラスをすべてそのままに残しておくことは不可能だろう。

海外資本が入って、大きなショッピングモールが出来たり、リゾート地として開発されるかもしれない。今あるギマラスの木々は伐採され、大きなホテルやプール、ゴルフ場に姿を変えてしまうかもしれない。しかし、そのショッピングモールは、ギマラス住民のためではなく、海外の観光客などのための施設にすぎず、ギマラスの人々にとってはなんら利益がない。また、大きなショッピングモールなどが出来たことでお金持ちの人が訪れるようになり、草原で元気に走り回っていた人懐っこくてかわいい子供達が海外から来る人にお金をねだるような、物乞いをするようなストリートチルドレンになってしまうかもしれない。そう思うと胸が締め付けられる。

私はあの子供達に、今までのようにこれからも自然と共に生きていってほしい。私達にはない、温かさと寛大さでこれからも家族や周りの人を笑顔にする中枢であり続けて欲しいと願っている。

確かに考えすぎかもしれないが、長い期間をかけてギマラスが発展し、私達の予想のようになってしまう可能性は十分にあると思う。私がどんなに「それは嫌だ」と言っても、止めることはできないが、もしギマラスがそのように発展してしまっても彼らには今の生活を維持して欲しい。

開発されることで、良い部分もある。家に電気や水道などの設備が整えば、今までの生活はもっと便利になる。今までの生活も大切にしながらハイレベルな経済循環を確立していくことができ、彼らの生活はより良くなれる。

ギマラスの人々なら残った自然と共生し、自分たちで作ったものをマーケットで売って生計を立て、これからも経済を自分たちで循環させることはきっとできるはずだ。

発展というのは、他の国の企業や人が勝手に行っているものではないと思う。確かに発展することで利益を上げる人が出ると思うが、それですべての人が幸せになれるかといったらそうではない。

彼らにとって何が幸せなのか、心地の良い環境や生活なのか、改めて考え直すべきだ。

### かわいそうだけど幸せそう

私はこの六日間ずっと考えていることがあった。このセンターで出会った子供たちをどのような言葉で表現するか、ということだ。生活背景に隠された闇のように暗い部分と元気で明るい生命力を溢れる部分が混在する彼らをどのように言葉に表すか、なかなか納得のいく言葉が見つからなかった。

五日目に、初等部生と中等部生との合同ミーティングがあった。五つの班に別れてミーティングを行い、最後に全員に発表するというものだった。私達A班の四人は、センターを回ってきて驚いたことなどを踏まえて自分の意見を話し合った。そこで、チャイルド達の印象はどうだったかという話になった。

四人ともみな言いたいことは同じだったと思うのだが、うまく言葉にできない中、初等部生のみのが「かわいそうだけど幸せそう」と呟いた。それは初等部生ならではの素直でまっすぐな、見たものをそのままに捉えることができるからこそ、ぱっと出てきた表現であった。私はつい、どんな言葉で置き換えようとか、いろんな熟語を考え、ああでもないこうでもないと頭を抱えていたが「かわいそうだけど幸せそう」というみりの一言にその通りだなと思ったし、無駄に飾らない素直な言葉がフィリピンの子供たちに一番合っていて、なんだかしっくりきた。こんなに複雑なことを、そのままの言葉で一番伝わりやすく表現できることに圧倒させられた。子供達のすごいところは、先ほどから何度も話しているように、「貧困」とは思えないほど明るく、活気に満ちていて生命力が強いことだ。私達日本人は、大勢の人を前にしてたった一人で歌ったり、何一つ隠すことなく自分の弱さをみんなにさらけ出すことはすごく難しい。でもそれが、彼らにはできるのである。

私は3つ目に訪れたセンターでキムという女の子が歌ってくれた歌が特に目に焼き付いている。彼女はとても堂々としていて見た目も大人っぽかったが、笑顔はあどけなくて、そんな魅力的なところがとても印象深い。みんなの前で、歌ってくれたその歌は、zeddのclarityという曲だった。clarityというのは、表現や思想の明瞭さという意味がある。

私は、成田空港から家への帰り道で、印象的だったキムのことを父に話した。すると急に、彼女が歌ってくれたこの曲がどんな歌なのか、どういう意味なのかすごく気になって調べてみた。その中にこんな歌詞がある。

“High dive into frozen waves where the past comes back to life    Fight fear for the selfish pain, it was worth it every time    Hold still right before we crash cause we both know how this ends”

“凍りついた波へ高飛び込みをする 過去の記憶が鮮やかに蘇る場所へ 自分で生み出した苦しみへの恐れと戦っている 毎回それで良いと感じていた 許してしまう前に気持ちを押しえ込んで 私たちが最後どうなるかお互いわかっているのだから”

(<http://lyrickonjac.com/zedd/clarity>)

重たいスーツケースを引きながら私は涙が止まらなかった。それがなぜかはあまり覚えていない。この六日間を思い出して自分の無力さを実感し悲しくなったのかもしれない。もっとフィリピンにいたかったという思いだったかもしれない。でも、私はこの時確かにキムの強さをこの歌詞に感じたし、うまく説明できないが彼女らしい曲だなと思った。そして胸にこみあげてくる何かがあった。

先ほどの話と矛盾してしまうが、「フィリピンのチャイルドたちは決してかわいそうではない。」その時私はそう思った。

確かに、七、八人で生活しているようには到底見えないような狭い部屋で、電気もなければ水道もない暮らしを目の当たりにして、「たいへんそう、かわいそう」と思ってしまった自分がある。

しかし、彼らは私にはない強いパワーや、自分のことより相手を思う寛大さ、そして大きな夢を持っていて、その姿はキラキラと眩しく輝いて見えた。かわいそうというのは、自分にはあるものを持っていないくて気の毒に思うことを言うと思う。生活水準や物でいえば確かに私たちのほうが富んでいる。しかし心や生き方でいえば確実に彼らのほうが富んでいるし、私に持ってないものを持っている。それなのに、上辺だけの貧困の知識とイメージで自分は彼らよりも上だと決めつけ、かわいそうと思っていた自分が無知すぎて恥ずかしい。

もう一度言うが、彼らは決してかわいそうではない。生きる力に溢れ煌めいている。むしろこんなに生活環境が整っているなかで将来何になりたいかも明確に決まっておらず、ただ毎日を送っていてチャンス逃している私のほうがよっぽどかわいそうだと思った。

## 生き方から学ぶ

フィリピンに行く前は子供たちを支援したい、助けてあげたいと思っていたが、実際に行ってみて、彼らの生きざまから学ぶことのほうが多く、彼らの支援はもちろんだが、彼らの夢の手助けをしたいと思った。

私は、ダスマリニャスのセンターで Steve と Trisha ととても仲良くなった。Trisha は、Steve が「この子は僕のベストフレンドだよ」と紹介してくれた、メイクがとっても好きな笑顔が愛らしい女の子だ。こんな短い時間で、たくさんのお話を話し、真面目な話も、時には少しふざけた話も出来て 2 人のことが本当に大好きになった。

お別れの時間はあっという間に来ってしまった。二人は、「Can we see again next year?」“来年もまた会える?”と聞いた。即答できなかった私は、「Maybe」としか言えず、彼女らはこんなに強く生きているのに、自分は何もできない無力さと哀感、もしかしたらもう会えないかもしれないという想いから、涙をこらえきれなかった。しかし泣いている私を見て、“またきっと会えるから！泣いたら怒るよ、ちさ”と Trisha に言われ、“いつか絶対また会いに来るから、忘れないでね”と Steve と Trisha と約束をした。この想いは一生忘れたくない、色褪せてほしくない素敵な思い出だ。

もうすでに私は、彼らに会って話がしたい。それは、今日本に帰ってきていろいろなことを振り返る中で 1 つ心残りがあるからだ。それはかれらにお礼を言えなかったことである。

私は、彼らの生き方や心の持ちようからいろんなことを学んだし、「今のままの自分じゃいけない」と思わされた。だから彼らに、あたりまえは決して当たり前じゃなかったことに「気づかせてくれてありがとう」とお礼を言いたい。

これは、実際に行った人にしか分からないことであり、もし私がこのままだ普通楽しい学校生活を送っていたらこんな気持ちになることもなかったと思う。

## 最後に

この経験から私は、彼らをサポートすることが自分の使命であると思う。高校生にできることなんてたかが知れているが、自分に何ができるのか、どのようにこの体験をみんなに伝えるか。まだ答えは出せていないが、考え続けていきたい。

そして、皆さんには“貧困”というイメージのフィルターをかけて子供たちを見るのではなく、ひとりの人間として強く生きる素晴らしい彼らを、一人でも多くの人に知ってもらいたい。彼らには彼らにしかない良さが、私たちには私たちにしかない良さがある。だから、私は彼らを“支援”するのではなく“相互に助け合いたい”と願う。この経験はこれからの人生で何度も私を助けてくれると思う。

このフィリピン訪問プログラムのキャッチコピーにもあるようにまずは彼らに「会いに行く」からはじめよう。

そして、今の私のような想いを持つ人が一人でも多くなることが貧困問題と世界が向き合う大きな一歩になる。



2年女子

10年越しにフィリピンに帰ってきて感じたこと

## 懐かしさと新鮮さを感じながら

空港から出た瞬間に感じる生暖かい空気。外の景色を眺めていればそこら中にある Jollibee。10年前、私は父の仕事で4年程首都マニラで暮らしていた。仕事の関係だったとはいえ、今でもフィリピンは第2の故郷だと思っている。このプログラムに参加した理由、それは、私が住んでいた時から劇的に経済発展を遂げた姿をこの目で見てみたかったから。そして、駐在中はまだ幼かったのもあり直感的にしか物事を捉えることができず、何が原因で街にストリートチルドレンが溢れ、どうして衛生環境が悪く悪臭がするところもあれば世界一大きいんじゃないかと思うくらい巨大なショッピングモールがあるのか知る術もなかった私が、高校生になった今、知識と現地で得る情報を元に自分の住んでいた国をもう一度見つめ直したいと考えたからだ。

## 貧困の種類

今回訪れたセンター(\*)の数は3つ。1つ目はイロイロ、2つ目はギマラス島、最後に行ったセンターはマニラ北部のスラム街、ダスマリニャスにあった。それぞれの地域で抱えている貧困問題、社会的背景、経済発展の度合いは本当にバラバラで、そこに住む子供たちの抱えている問題(教育問題や家庭内暴力、生活環境など)も少しずつ違った。

例えば、イロイロは未だに地主と小作人の関係が続く農業中心の地域社会だが近年政府の政策で急な経済発展を遂げていて、整備された道路沿いに並ぶ高層ビルや大型ショッピングモールから一本道を外れただけでボロボロな家が密集する団地が広がっている。ギマラス島も農業や漁業などが中心の自然豊かな島で食料には困っている様子はなかったが、島の中のみで生活が出来る為、現金収入が少なく医療関係が全く整っておらず、ほかの地域に比べて平均生活水準が下回っている。最後に訪れたダスマリニャスはみんなが想像する貧困のイメージに一番近いかもしれない。衛生環境は最悪で、都市部の貧困地域のため農業ができるわけでもなく、労働賃金は安く、食料困難や栄養失調にもなる可能性が極めて高い3つの中で1番生きていくのには過酷な環境だった。同じ国の中でもこんなにも生活環境や経済的発展、

政府の政策の浸透度合いが違うのかと大変驚いたが、どこのセンタースタッフもその土地に合わせて地域発展のためのプランを立て、問題解決方法を探り、地域共同体に溶け込み信頼を得ていた。そんなセンタースタッフのスペックの高さに驚かされる一方で、例で表した通り、貧困と一言ではいい表せないほど地域によって貧困の種類が違い、こんなにも地域、気候、社会的背景で貧困のレベルや深刻さが変わってくるのかと疑いたくなる気持ちにも駆られた。テレビで見る貧困はほんの一部分に過ぎないし、何よりそこに住む人にしか分からない地域の問題は実際にその土地に自らの足で立って生の声を自分の耳で聞くまで分からないことをここにきてようやく知ることが出来た。

(\*) センターとは、ChildFund Japan が現地にもつ施設のことである。そこには社会福祉士などの貧困問題や子供の人權問題を専門とするスタッフが ChildFund Japan の支援を受けている子供たちを支えている。

## NPO という存在

地域の問題を解決するにあたって必要な組織は3つ存在する。行政と地域共同体と NPO である。1つ目の行政は、直接的な解決手段を下すには力が強すぎ、支配的な援助しか出来ず、地域から遠く離れた組織として存在する。2つ目は地域共同体である。コミュニティがしっかりしている程、問題解決に及ぼす影響が大きいが行政とは反対に、意見をまとめる力も案を実行する資金もなく、専門的な知識を持った人がいるわけでもないので誤った方法で問題を解決しようとする可能性がある。3つ目の NPO NGO は政府と地域共同体の中間に位置する組織で、NPO NGO のみで活動して地域を支えようとしてもあまりにも微力だが、地域や行政の様々な情報を収集、共有したり、行政の法案、サポートを地域のために活用したり、時には地域の特徴となる文化や環境を保護する立場をとるなど、両方のバランスを取る政府と地域のパイプ役を担う。そんな NPO と今回直接関わる機会を得て、NPO の頼もしさや地域から信頼を得るために地道に努力するスタッフの大変さを垣間見ることができた。訪問したどのセンターも地域に溶け込み信頼を得ていて日頃から頼られる組織として存在していた。そんなセンターのことを考えているとき先生から1つの新しいことを教わった。支援には STAY と LIVE の2つのやり方がある。私なりの解釈としては、その地域の問題や状況を考えた時、住み着いて支援したい (STAY) と思ったならその覚悟を持ってその土地に住み着き、地道に信頼を得ながら地域に寄り添って助けられながらも問題を解決する手助けをする。そこに住み着く勇気がなかったとしても (LIVE) 外の者として地域に訪れながら外の情報を発信し、地域に解決のすべを提供する。また外に向かって地域の状況や情報を発信することも大切な役目だと思う。どちらも地域支援には欠かせない役目を担っているし、片方だけでは偏った一方方向な支援、つまり押し付け支援になる可能性もある。

## 貧困の流れ、理想、最終的な貧困

貧困と言っても、地形、文化、風習、それまでの環境や収入源などの条件によって様々な貧困の形があり、どれ一つとして同じ貧困は無く、解決方法もケースバイケースである。解決するには NPO などで働くエキスパート達の知識と経験が必要不可欠だ。しかし、貧困の基準として用いられる生活水準の値が低かったとしても地域のコミュニティがしっかりしていて、自給自足ができていところは、例え現金収入が低くても本人達は自らが貧困層に当たることを意識することなく生きていける。そのような社会を

文化人類学の用語で COLD SOCIETY ということを今回学んだ。COLDSOCIETY とは、社会がその地域だけで成り立つことができ、変化を求めない循環型社会のことを言う。例えるならば、田舎の農家などは自給自足しながら足りない分は近所の他の農家と助け合って生きている。生きて行くのに必要最低限なものは全て揃っていて SIMPLE に暮らす。そこでは地域のコミュニティの強さ、皆が助け合って生きていくことが必須で主に自助（自分で自分を助けること）、共助（地域共同体の規模で助け合うこと）、公助（行政による援助、支援のこと）でいうと共助が強い。それに比べて HOTSOCIETY というものもあるが、これは COLDSOCIETY とはほとんど真反対の社会を意味する。もっといい状況、社会にするために常に変化を求め、環境を変えつづけていく社会のことを言う。

HOTSOCIETY	COLDSOCIETY
常に変化を求める。	社会が持続することを求める。
直線的な環境、状況変化	円、循環型な環境

先進国、経済的に発展している国や地域はほとんどが HOTSOCIETY にあたる。COLD SOCIETY のことを発展途上国や未開発都市と言い換えられることが多いがそう呼ぶのは HOTSOCIETY に住むものだけであることに現地に行って気付く。そして先進国と途上国との格差や途上国が今までの先進国のよううまく経済発展ができていないのには HOTSOCIETY の身勝手な計画が原因だと考える。COLDSOCIETY に経済発展をもたらそうと HOTSOCIETY が短期の投資や急な都市開発を施そうとすると地域独自のコミュニティで築き上げてきた社会が急激に発展し、形を変えてしまう。今回行って来たギマラス島は海外企業が一切入っていない言わば COLDSOCIETY の代表例だった。この例を用いて、COLDSOCIETY が HOTSOCIETY によって経済発展を促されるとどうなるのかシュミレーションしたいと思う。（あくまで1つの可能性として例を挙げる。）

例) ギマラス島では、島の中だけで生活することができ、食料もインフラ設備もインターネットが使える電波などの必要最低限のものは全て揃っていて、現地の人言葉でいうと、「SIMPLE LIFE」そのものだった。そこに来年、開発が進んでいる隣のイロイロ島から橋がかかるという大きなプロジェクトが実行しようとしている。このプロジェクトの指揮をとるのは海外企業で、橋がかかればギマラス島はスキューバダイビングが有名なリゾート地として開発が進む予定である。（ここまでは実際に話が進んでいる現実の話である。ここから先は、私の1つの極端なギマラス島の先進国による影響を受けた結果を予測したものである。）

↓

橋がかかり開発が進めば島は一時的に潤う。（企業も現地で人を雇う為、サービス業や工事現場での肉体労働などによる現金収入）しかし、観光客のお金はほとんどホテル、ショッピングモール、アトラクションを運営している海外企業によって吸いとられていく。地域のためのマーケット市場も海外の大型マーケットに奪われ地域コミュニティの基盤である住民同士の支え合いが崩壊する。（この例は日本の地方都市の商店街が大型スーパーによって閉店せざるおえなくなり、商店街の活気を失うのと同じ現象だと考えて良いと思う。）

↓

土地はリゾート開発のために次々と開拓され、自然破壊と同時並行で、もともとその土地に住んでいた住民を他の地域に移住させる。コミュニティが崩壊しつつある地域では共助が弱まり、ますます自分の収入のみに頼るしかなくなる。収入を増やそうにも現地採用で安い賃金で働くしかないから島から出て行き仕送り生活が始まる。

↓

土地は自分たちのものではなくなり、コミュニティも昔のように強くはなく公助も弱い。収入があっても物価は高くなるし自給自足の生活が崩れたから輸入に頼り、ますます地域のみで社会は循環できなくなる。

こうして、HOT SOCIETY の成功例にもなれないまま中途半端な社会が出来あがり、地域共同体も崩壊していて自分自身にしか頼れない弱くて貧しい地域が出来上がる。そもそも COLDSOCIETY と HOTSOCIETY はそれぞれ別物で HOTSOCIETY が投資や都市開発などの自分たちのやり方で COLDSOCIETY に強要してはいけなし、HOTSOCIETY は COLDSOCIETY より優っているという考え自体が間違っている。そして一番残念なのが、一度 HOTSOCIETY になってしまったら、簡単に地域のコミュニティ、共助を取り戻すことは大変難しいのである。簡単であれば、日本や他の先進国の社会問題である孤独死や目に見えない貧困問題はとっくに解決されている。

ならば、HOTSOCIETY と COLDSOCIETY それぞれのいいところを取った理想の社会はできないのかと考える人もいると思う。残念ながら私はそんな理想論は語れない。ただ、私が今回現地を訪問して学んだ上で見つけた、たった 1 つの実現可能な範囲にある理想の社会がある。それは教育や医療、経済のレベルが高く、コミュニティもしっかり残っていて地域社会のみで循環出来ていなくても共助がしっかりしている社会。(しかし COLDSOCIETY のコミュニティを維持したまま、HOTSOCIETY のような経済発展を遂げるのは極めて難しいのでその経済的な豊かさ、金銭欲ばかりを求めてしまっただけの理想的社会は作れないと思う)それを実現するには COLDSOCIETY が経済発展を遂げる前の段階で手を打たなきゃいけないと考える。仮にもし、COLDSOCIETY が経済成長をしたいのならば、今までの失敗例から学び生かすほどの高度で長期的な教育政策が一番必要になると思う。決して今ある先進国になろうとは思ってもいけないし、先進国の思うように進んではいけない。必ず自分たちで将来のことを考える力、海外の企業に地域共同体の基盤を崩されないコミュニティの強さ、そして何より地域で起こっていることを長期的な目で見えて自分たちで決断して行く判断力と決断力。これら全てがないと海外企業にいいように地域を作り変えられ、HOTSOCIETY になりきれなかったどうしようもできない貧困地域が出来上がってしまう。決して簡単なことではないが、そんな理想的社会を作り、自分たちの地域は自力で発展させて行くためには教育の力は必要不可欠であり、一番に大切な部門でもあると私は考える。

最後に、今回このプログラムの参加者に選んでくださり、また多くの知識と経験を与えてくださった先生方。一緒に現地で学び共有し、たった 6 日間で互いに尊敬しあえるまでの仲になれたみんな。私にフィリピンで 4 年間過ごすという貴重な経験を与えてくれて、今回のプログラムにも参加することを許してくれた両親に精一杯の感謝の気持ちを込めて終わりとさせていただきます。



3年男子

## 私の使命

### 第一章 行く前の自分

行く前の自分は、はっきりいうと、貧困の真の姿がよく分かっていなかったと思う。自分の目で真実を確かめるためこのプログラムに参加しようと思った。今までは、テレビのニュースや新聞、本などで貧困問題に触れてきた。しかし本当はどうなっているのか分かっておらず、それを知りたかったのだ。そして、昨年の二学期から始まった事前学習。座学が多かったため、貧困に対するイメージはかわいそう等といった憐れみのものであった。今振り返ると世界の支援、教育、子ども達について様々な知識を手に入れられたが、真の姿からは少し離れていたようにも思う。「論より証拠」ということではないだろうか。座学で理解するよりも、体験をした方が理解もより深まったと思う。ここで、今回の事前学習を振り返りたい。私たちはかなり大きな視野で広く貧困問題に触れてきた。支援の現状や子ども達の環境が主なテーマであった。支援の現状では、押し付け支援・一時的支援や持続可能な社会形成のための支援とは何かについて考えた。私たち先進国の支援がどのようなものかについてだ。そして、子ども達の置かれている環境では、ストリートチルドレンや国の支援施設、ジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレンについて調べた。所謂、一般的に知られている貧困についての理解をした。フィリピンへ行った後の今の自分から見るとやはり真の姿には迫れていなかったと思う。

### 第二章 行って分かった現実

実際に行って見たものは事前学習のものとはかなり異なっていた。まずは、都市部の貧困についてである。フィリピンのカビテ州ダスマリニャスでのことだ。都市の貧困というと、トタンや段ボール、布などで出来ているスラムやホームレスの人々、ストリートチルドレンをイメージする人が多いと思う。しかし、このダスマリニャスは少し違う。まず、ダスマリニャスのスラム形成について説明する。チャイルド・ファンド・ジャパン (CFJ) の職員に聞いたところ、マニラの都市開発が進むにつれ、都市景観のためにスラム地域の解消を計画した。そしてその方法としてダスマリニャスに大規模な再定移住区を設け、そこにスラム住民を強制移住させた為にできたスラムということである。つまり政府がスラムの解消法として無理やり新たなスラムを作り出したともいえる。

次にスラムの環境だ。建物はトタンや段ボールで作られた張りぼてのようなものではなくコンクリートで作られた家であった。しかし、その家のなかは大変狭いものであった。衛生環境は良くなく、上下水道、ガスは通っていない。近年になり、やっと電気が通ったのである。水は汚い水でさえ買わなけれ

ばならない状態である。きれいな水は高価なものとなっているのだ。病院はすぐ近くに存在しておらず、政府からは見放されているといっても過言ではない。

スラム街に住むスラム民はどうだろうか。彼らの多くは、マニラに出稼ぎに就いて生計を立てている。日雇いの土木建築作業やタクシーの運転手が主な職である。中には、ごみをあさり、使える瓶やペットボトルなどを回収して売っている人もいる。これらの職は決して安定しているものではない。そのため出稼ぎに行った一家の父が家では酒浸りで暴力をふるうということも日常的に行われるという。また子どもの数は増える一方である。そのため、Angely Fernando(現地スタッフ)に伺ったところ、近くにある高校では校舎も教師も大幅に足りていないとのことだ。そのため、午前の部と午後の部に分かれている。更には現在新校舎も建設中である。

しかし、ここで注目すべき点はスラムの中で独自のコミュニティが形成されてきているということである。彼らは自分たちの弱いところを共有し合い、共生しているのである。子どもたちの仲の良さにもよく表れており年齢、男女関係なく遊んでいた。そしてそこで重要な働きをしているのが「センター」と呼ばれる施設である。「センター」とはその地域の大学や教会が運営する、日本でいうところの地域包括支援センターのようなものである。

続いては都市部とは対照的な農村部についてみていく。農村部はイロイロ州、カバトゥアンだ。イロイロ州のカバトゥアンは平野部も多く稲作などが多い。学校教育も他の州に比べ進んでおり市長は教育開発の賞を受賞していた。しかし、ギマラス同様、上下水道や道の整備、電話線などの基本設備があまり整っておらず、水に至っては村に一つか二つしかない井戸に汲みに行かなければならなくなる。主な職は小作農や市場での物品販売だが、その不足部分はイロイロの中心部の都市に行き日雇いの土木建築作業やジプニー(タクシーのようなもの)、トライシクル(バイクタクシー)の運転手をしている。

そして、どちらも都市部と同様に共同体の意識が残っている。センターも勿論あり、活動の内容も似ている。またどのセンターも「Value Formation」を大切にしていた。

### 第三章 ギマラス島の今

ギマラス州は都市開発が全く行われておらず、自然が残っている島だ。島の大部分が丘陵地になっていて平野部は少ない。木々が生い茂り、海の幸もある自然の恵みにあふれている島である。そんな中、島民は自然と共生しているのだ。例えば、家は丈夫な竹や木々で出来ており、風通しも良く、海岸沿いの家は台風にも強い。彼らの収入は農産物としてマンゴーやココナツ、ライム、そして海産物が主で、その他にジプニー等の運転手をしている。学校はあまり数が多くなく、学校まで行くのにかなりの時間とお金がかかってしまうようだ。

そのような中、近年自然あふれるギマラスがリゾート開発されるという話を現地のセンタースタッフから聞いた。その中身は、イロイロという都市があるパナイ島とギマラス島を結ぶ橋を架けるといふものだ。そして、それをきっかけにリゾート開発が始まる。これにより、交通の便が良くなることは確かである。それまでは、舟で島と島を行き来していたからである。しかし、橋が出来たら舟で生計を立てていた人は困窮してしまう。他には島の資本が増えるという良い可能性もある。リゾートホテルなどの建設、運営があるからだ。更には、島に今までジャンクフードがなかったが、橋の開通により新しいジャンクフードの企業の流入も考えられるからだ。しかし、そのような場所でギマラスの島民が雇われるという保証はない。また、新たな文化の流入が今までの島の文化を壊す恐れもある。更にフィリピンの問題としてある、リゾート地のゴミ問題も起こり得る可能性もある。このように、ギマラスは絶えず変化を続けるような島となった。来年度には同じ姿が見られなくなる可能性も指摘できる。数年後にはスラムが出来ている可能性もあり、貧困の型が都市型に変わる恐れもある。

### 第四章 「Value Formation」とセンター

まず、現地の教育の特徴として「Value Formation」というものがある。これは、自分たちの持っている価値を気付かせるというプロジェクトだ。このプロジェクトの有無は地域の活気にも繋がってくる大きなものであると私は考える。この「Value Formation」が子どもたちの自己肯定や自信に繋がり、この状況から脱却しようとする力へと変わっていくのである。その子どもたちが将来フィリピンの国会議員、人々を救う医師、教育を授ける教師になる夢を持つようになるのである。例えば、イロイロ州、

カバトゥアンのセンターでは、「SOTO(Seed Of Tomorrow Organization)」や「SOLO(Seed Of Life Organization)」がある。「SOTO」は子ども達に対する Value Formation で「SOLO」の方が大人に対するものである。また、カビデ州ダスマリニャスでは、子どもたちが「子どもの権利」を訴える活動として壁画を描いたり、パレードしたりしている。

この「Value Formation」を行う所がセンターである。ここでは、ダスマリニャスのセンターを例に説明する。「センター」とは簡単にいうと、地域包括支援センターである。ダスマリニャスでは「St. Magdalene of Canossa Center - 35」と呼ばれる CFJ(チャイルド・ファン ド・ジャパン)プロジェクトセンターがある。CFJ プロジェクトセンターとは CFJ が運営資金などを支援しているセンターのことである。このセンターのヴィジョンは、地域の人々の個々の健康や幸せを、神の福音の価値、神への信仰、神からの使命として生み出し、持続していくこと。(We, the St. Magdalene of Canossa Center, envision ourselves a happy and healthy individuals in the community created and sustained by the gospel values where God's goodness reign over the lives of the people witnessing their Christian faith which is the fulfillment of the mission of Christ.) このヴィジョンからも分かる通りこのセンターの運営はクリスチャン(カノッサ修道会)によるものだ。このヴィジョンに沿って大きく分けると三つの支援をしている。一つ目は子どもへ、二つ目は家族へ、三つ目はコミュニティへの支援をしている。子どもたちへは勿論、教育を支援している。このセンターの最高責任者の Eduardo D. Sola に伺ったところ、彼らは教育を最も重要視していた。また、教育における一番大切なことは、子どもたちの将来の仕事のためにするものという目標であった。このように教育のやり方ではなく、目的意識を大切にしている。将来を見越した、持続可能な社会を作ろうとしている支援をしているのだ。また家族へは親とは何かを教えたり、家庭内暴力の禁止を呼び掛けたりしている。更にはコミュニティの再建にも力を入れている。再び地域共同体を生み出し、その運営の知識を教えている。この支援のおかげで今ではコミュニティもある程度再建され、家庭内暴力も減ってきている。また、子どもや親への支援として最も大きな役割を果たしているのが、先程の「Value Formation」である。これらのことから分かるのは、「センター」は持続可能な社会作りの為に地域と共に歩んでいく支援団体ということだ。

## 第五章 理想の支援とはなにか

ここからは支援の理想を考えていく。事前学習を踏まえると、「押しつけ支援」は望ましくない。そして、「一時的支援」だけでは根本的な解決に至らない可能性がある。そこで、「共に考え、共に歩む支援」が必要になってくると考える。具体的にどのような支援か示してゆく。CFJ(チャイルド・ファン ド・ジャパン)がフィリピンで行っている支援の点からみていく。CFJの活動の基本は募金から成り立っている。しかし、物資を援助するだけの支援ではない。そんな彼らのヴィジョンは、ChildFund Japan ホームページ(2015)によると、「すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成」である。持続可能な社会形成の支援であるといえる。彼らは自立を助ける支援をしているのだ。先程の「センター」がその実現の場にあたる。センターでは、共に歩む支援が達成されていると思う。更には支援から独立したセンターも実際にあり自立支援は成功していると考えてよい。自立支援の根幹にあるのが子どもたちへの教育の充実である。その中には「Value Formation」も含まれる。この「Value Formation」が子どもたちの自己肯定や自信に繋がり、この状況から脱却しようとする力へと変わっていくのである。CFJによると、実際にセンターで育った子が国会議員になることもあったそうだ。その為、「共に考え、共に歩む支援」が理想的だと考える。その支援で足りないところを「一時的支援」で補う形がよいと思う。

## 第六章 私の使命

第一の私の使命は伝えることであると思う。実際に現地に行って見て、知ったのだから当然伝える義務があると思う。知ったのにそのまま伝えずしておくのは無責任である。そこで、二年生であった私は平和共生論文を使い伝えようと決めた。本来は夏休みに決めて用意していた「憲法九条改正について」をテーマに書くつもりでいたが、帰国後に本当に私が伝えたいことは「九条改正」ではなく「フィリピンの貧困」であると考えたからだ。また、高校生の今しか書けない論文であるとも思った為、テーマを変えた。論文では、先程から使っている「貧困」という言葉を数値によらず、『何らかの「暴力」の存在により「権原（特に交換権原）」が剥奪された状態である』と再定義した。このように、貧困についてより深く考える機会を得ることもできた。他には直接伝える手段も取っている。しかし、真剣に耳を傾けてくれる人が少なく、かなり難航している。今後の課題は、どのようにすれば真剣に話を傾けて貰えるかである。より多くの人に真の姿を伝えていきたい。

第二の使命は、常に知り続けるということである。この「知る」ということは支援においても、また将来においてもとても重要である。将来に関しては後程説明する。この支援において重要である理由とは、何も知らずには適切な支援ができないはずだからである。例えば、相手が何を欲しているかも分からずに物資を送ることはできない。仮にできたとしても、「押しつけ支援」になりかねない。また、先程の定義より、どのような「暴力」が原因なのかを知る必要もある。その「暴力」が戦争によるものか、不景気によるものかでも支援の仕方が大きく変わってくるからだ。更に、どのような権原が剥奪されてしまっているのかを知る必要もある。彼らがどのような権原を必要としているかを見極めるためである。その二つを知るだけでもかなり支援の仕方が変わってくるはずである。また、それに加え現地の政治体制、法制度、情勢、経済状態を知っておくとよりよい支援につながると思う。ここで気を付けるのは、相手のことだけでなく自分のこともよく知っておく必要がある。「貧困」を生み出している原因に自分も関わっていて、遠い国の問題として考えることのないようにするべきである。そしてこの「知る」ということの最大のポイントは自分がまだ学生であるということだ。つまりは、時間をかけて「知る」ことが出来るのは学生の特権であるということだ。社会人になってからは十分に時間が取れないと思う。よって、学ぶことが本業である学生の内に様々なことを知っておく必要があるのだ。更には学生の内から積み重ねたものはきっと将来の力になると思う。

そして、第三の使命はかなり先の私の将来についてのことだ。今までの私の将来希望する職は国内の弁護士であったが、フィリピンから帰ってきて変わった。私は、国際弁護士として世界中の法で貧困問題にアプローチする者になると決意した。いつかはフィリピンへ帰り、現地で子どもたちの明るい笑顔の為に働きたいと決めた。またフィリピン内にとどまらず様々な国の子どもたちのもとへ飛び回りたい。ここから先は、ひたすら休みなく動き続ける人生を歩むつもりである。まずは、英語力の強化が必要となる。この習得なしには何も始まらない。強化の為に大学へ進学してからは単位互換の留学をする予定だ。またこの一、二年間では、平和共生論文の加筆修正をし、一つの学術論文として完成させる。もう既に取り組みも始めている。さらに、そのためにフィリピンの法律の知識も蓄える。また大学を卒業後は法科大学院へ進学し国内の司法試験を受ける。そして、渡米しマスターを取得し国際弁護士を目指す。このように私は冗談ではなく、本気である。やらねばならぬと考えたからだ。これが最大の使命であるのは自分の中で明確である。

このように、私はフィリピンへ行ったことにより大きく自分を変えられた。行かなかったら分からないことも変わらなかったことも山のようにある。この経験は国内に居ては気付けないことに気付かせてくれた。私は知ったのだ。だから、なにもせずにはいられない。責任もってこの問題に向き合っていくと決意した。



3年男子

## はじめに

今回私はこのプログラムに参加するのは二回目になり、昨年もフィリピン独特の雰囲気を感じ、たくさんのことを学んできたが今年も同じくらい貴重な経験をすることが出来た。昨年はフィリピンの子供たちや街並みなどからフィリピンの現状を把握し、自分が日本で生活して当たり前だと思っていた常識が良い意味で壊された。その土台を持ちながら今年考えたことは昨年と変わらず、私たちが貧困に対してどのように関わっていけるのかということだった。今、高校生の私たちが出来ることは少なく、大きな力ではないがそれでも自分達が出来ることを一生懸命に考えた。そしてフィリピンから帰って来た今も変わらず考え続けている。私達フィリピン訪問プログラムのメンバーで深めたことをこの報告書で共有できれば良いと思う。

## 事前学習

今回も訪問をするにあたって、フィリピンの現状や貧困問題の仕組みを知るために各自で本などの資料を集め、みんなで情報を共有した。私は「ポバティー・インク あなたの寄付の不都合な真実」という映画見て、企業や NGO が行った支援でその支援が貧困層の人々に悪影響を与えたいくつかの例を知り、自分勝手な支援は逆に貧困層を苦しめるという事実を知った。そこから企業や私たち先進国に暮らしている人々の感覚と、現地で生活している人々の考えや価値観の違いについてもっと考え直さないといけないと考えた。ほかのメンバーの発表でも気付かないうちに私たちが貧困層の人々に抱いてしまっている偏見や差別をしてしまっているのではないかと確認させられた。また貧困を解決するためには政府はどのような政策をとればいいのか、ある NPO 団体の活動を中心に貧困の現状などを日本で勉強し、フィリピンに行く前の準備を行った。このときの私は一年前も事前学習を行なったこともあり少し貧困のことを知った気になっていたが、みんなの発表を聞いて、新しい情報をたくさん知り、貧困の問題の大きさや自分の勉強不足を感じた。

## 現地での発見

今年も去年と同様のセンターというチャイルド・ファンド・ジャパンが現地の学校や教会と契約し、その地域の子供たちをサポートしている場所を訪れた。環境が違う三つのセンターを訪れ、そこで子どもたちと触れ合ったり、センタースタッフから子供たちのことや現地のリアルな状況についてお話を伺っ

たりした。それぞれのセンター周辺の特徴は全く違い二日目に訪れたセンター41では近くに町の市庁舎や教会、サリサリストアという食料品や日用雑貨の小売店が集まったマーケットがあり、人が多く集まり賑わっている場所だった。マーケットの様子は生の魚や肉でも木の机に置かれるように陳列されており、そこにはハエのような虫がたかっている状況で衛生環境は悪い状態にあった。私たち日本人にしたら目に見て分かる衛生環境の悪さのなか、それを気にする様子はなく、現地の人々は商売を行っている姿は違和感だった。この違和感は先進国と発展途上国の生活水準の格差の大きさを分かりやすく私を感じたからだと思う。カカオのお菓子を作っている工場では、案内される前に工場と紹介されていたのでどのくらいの規模なのかと想像し、そして工場に到着するとそこにはフィリピンでは少し大きめの民家があるだけだった。そのままカカオがお菓子になる過程を案内してもらった。工場で働いている人は三人ほどで、私はこの規模の小ささに驚き、日本とフィリピンの感覚の違いを感じた。

三日目はイロイロから船に乗り、ギマラス島を訪れた。小さな島ということもあり、近代的な大きなビルなどはなく、開発の手が加わっていない自然、周りにはきれいな海が広がる環境とローカルで温かい雰囲気があり、日本では感じることでできない大きな魅力を私は感じた。ギマラスではセンター訪問をし、そこでたくさんのスポンサーズチャイルドに日本の折り紙やコマを教えてあげたり、現地の遊びを教えてもらったりと交流をはかった。一緒に遊んでいると時間を忘れ、あっという間に時間が過ぎていた。ギマラスでは主に今回訪問したメンバーが支援しているチャイルドのお家を訪ねて、その家の生活状況や子供の様子を直接知ることが出来た。当たり前だがそれぞれ違う形や大きさの家、家族の人数、職業などがあり、そこには一人一人名前を持った人間が生活していて、日本にいてフィリピンや貧困のこと考えているだけでは絶対に知ることが出来ず、意識できない個人の存在があることを改めて知った。その人と会話し、触れ合い、一緒に時間を過ごすことでしか得ることの出来ない繋がりという目には見えないが大切なものを去年感じ、今年も新しい友達とつながれたことを本当にうれしく思う。この経験は高校生の今だからこそフィリピンの同世代の子たちととても近い距離で交流でき、公用語が違っても、生活している環境が違ってもフィリピンで友達を作れたことはとても貴重な経験だった。この経験はこれから一生できない経験だと思う。

四日目は首都マニラか車で二時間半ほど行った、カビテ州のダスマリニャスというスラム街を訪れた。私はこの場所も訪れるのは二回目だったがスラム街の雰囲気はやはり慣れず、道は狭く入り組んでおり、家はごちゃごちゃと立ち並び、三日目に訪れたギマラスとはかなり違った印象を受けた。三日目のギマラスの印象が明るくキラキラしたものなら、ダスマリニャスは暗く怖い印象を持った。初等部生がダスマリニャスを灰色のイメージと言っていて自分の中でなぜかしっくりきた。ここでは衛生のことが問題になっていて、センターの中にはごみの持ち帰りを促すポスターが掲示されていた。また家庭で使われた生活排水が道路に垂れ流されている現状を見て、衛生に関する正しい知識が不足していたり、インフラ設備が整っていなかったりすることが目に見て分った。日本では当たり前のような常識でもまだまだ普及していない知識があり、今までにない習慣を取り入れることは難しいと聞いた。

三つのセンター周辺の地域はそれぞれ貧困という共通の問題を持ちながらも、問題になっていることの中身は細かく分類し、整理すると、優先順位は異なり一つの例を挙げるとギマラスでは職業が限られ、宿泊施設などの建設をバラングイ（フィリピンの最小の地域区分の単位）のバラングイ長さんが考えていた。ダスマリニャスではほかの地域に比べマニラに近く位置するため職業の問題よりも公共衛生や医療のことについての優先順位が高かった。このように各地域で挙げられる問題は似たようなものが挙げられるがケースバイケースでその地域ごとに対応を考えていかないといけないと学んだ。それぞれの地

域の特徴を把握せず、一般的に貧困に対して有効であると考えられている対策をただ行っても、その結果にはばらつきが出てしまう。それは援助の効果が低かった地域が悪かったわけではなく、支援の仕方が間違っていただけだ。これは事前学習の時に見た「ポバティー・インク あなたの寄付の不都合な真実」で学習していたことが現地で実際にリンクしていることに気づくことが出来た。貧困を勉強する以前は私の極論だが、貧しい人にお金を渡せばすべての問題は解決し、それを大きな力を持っている機関が行えば良いと考えた。しかし貧困に関して情報を集め、現地の多種多様な問題を知った今の私は本当の意味で貧困の問題の大きさ、複雑さを知ることが出来た。

## フィリピンの子どもたち

今年の訪問でもたくさんの子どもたちとの出会いがあり、特にセンター出会ったスポンサーチャイルド達は貧しい中でも楽しく一生懸命生活しているということを知ってほしい。センター35には高等部が支援しているチャイルドのひとりカミーレが生活している。今年も昨年同様に彼女の生活している家と通っている学校を案内してもらった。彼女の性格は明るく、話しているだけだったら彼女が貧しい家庭環境に育っていることを全く感じなかった。しかし実際彼女は貧しく、何度もこのプログラムでカミーレと交流している先生の話によれば数年前は内向的でもともと明るい性格ではなかったようだ。彼女がどうして変わったのか、それはセンターの存在とセンタースタッフの存在が大きいと語っていた。センターではバリューフォーメーションという子ども達に自信を持たせ、自立する力を与えるプログラムがある。このような言葉にすると簡単なような気がするが実際はとても難しくセンターでは何年もかけてスタッフが彼らの成長に寄り添い、サポートしている。ほかにも私たちがセンターを訪問した際にチャイルド達は歓迎のダンスや、歌などの出し物をしてくれた。これはダンスや歌の上手なチャイルドに自信をつけさせる経験になっている。このように少しずつ少しずつ心を成長させていくことの重要性について考えさせられた。センター35で仲良くなった私の一個上で18歳のJohnは私たちが歓迎する際にチャイルド達の中心になってダンスを踊っていて、話していると日本について興味を持っており、YouTubeで日本のアニメを見て勉強した簡単な日本語を話していて驚いた。彼の夢は先生になることで、なれることなら日本で英語の先生になれたらと語っていた。とても気さくな性格で打ち解けるのに時間はかからなかった。私は彼の姿を見て、私なんかよりよっぽど彼のほうがしっかりとしていて、積極的に勉強していることや、年下のチャイルド達に慕われ、自分の夢をはっきりと持ち、語っている姿に尊敬した。これらのことは日本人の私たちも見習うべきところで先進国だからといって、発展途上国よりもすべてが優れているわけではなく、彼らから学ぶべきことも深く接してみることでたくさんあることに気づけた。もともとフィリピンの子ども、フィリピンという国は素晴らしい可能性があるが、多くの場合は環境によって、その可能性をいかしきれていない。私たちができることはそんな彼らを支え導くことではなく、彼らが自分たちの道を切り開いていくための手助けをすることだ。それはエンパワーメントといい、私が今回の訪問で考えさせられた一つのキーワードである。私のような高校生が大きな経済支援をすることは不可能だが、エンパワーメントという新たな支援方法なら私も何かできるのではないかと思った。訪問中に二度、別の場所の市役所に案内され、市長からお話を聞いた。このことは私たちにとってはただ市長のお話を聞いたただだが、彼らの視点からすると、遠く日本から日本人がこの市役所を訪れ、この地域の話聞いていったという日本人の私たちからしたら大きなことには思えないが、フィリピンの人々の中では大きな成果になる。また、チャイルド達と交流し仲良くなることは、フィリピンと日

本でお互いに遠く離れていても特別な友達として繋がっている、少しでも自信につながるのだと思う。このように彼らの手助けが少しでもできると知れたことは大きな収穫だった。

## ギマラスの今後

今回の訪問で私が考えたことはギマラスの開発についてだ。昨年ギマラスを訪れた時に今までは船でしか行けなかったギマラスに大きな橋が架かり、開発が進む可能性があると聞いていた。今年はギマラスに橋が架かることが決定し、開発が進むことが分かった。これを聞いた私は大変残念に思った。この訪問プログラムでこの土地の明るい雰囲気が好きになっていた私は、このままの形でこの島が残らないことを知り、どのような変化を遂げていくのか想像出来ず、もし今のギマラス島と全く違う島になってしまったらと思うと複雑な気持ちになる。どうして、ここまで私がこの島を好きになってしまったのか考えると、ギマラスの人々のコミュニティが素晴らしいからだと思う。三日目の夜にミーティングを行ったときに先生から、公助と共助という言葉を教えていただいた。公助とは政府などの公的機関からの住民への援助で、共助は地域の共同体がお互いを助け合うことだ。日本は戦後に経済発展が進み、親族のつながりはだんだんと失われていき、社会の仕組みに公助の必要性が大きくなってきた。ギマラスでは公助よりも共助が行われており、家族のつながりや地域の中で住民が支えあい、生活している。私はこの日本や先進国で失われた共助の考え方に魅力を感じた。共助の考え方は現代の日本では理想的な考え方のように思えるが、それがギマラスではたぶん共助などと難しいことは考えず、助け合いの精神で行っていることが共助になっている。このようなギマラスの社会は私たち人間が本来目指すべき社会の在り方で、いかに効率化できるか、楽できるかを考えている現代の世界に生きる私は改めて共助の重要性に気づかせてもらったこのギマラスが大好きだ。しかし、今ギマラスは開発の手が外から介入することで変化しようとしている。それに関して、たった二回しかギマラスに来ていない日本人の私がギマラスの将来について選ぶ権利はなく、それは現地に住むギマラスの島民が決めることで、私個人の感情などではなく、島民が開発がどのような影響を持ち、ギマラスをどのようにしたいかが一番に優先されるべきだと思う。私たち外の人間が出来ることは開発のメリット、デメリットを理解する手助けをすることしか出来ない。たったそれだけしか出来ないけれども、それをどのような手段を使って伝えられるか、日本に帰って来た今、考えていきたい。

## 最後に

今回の訪問は、私にとって二回目の訪問で昨年との違いを比べながら約一週間過ごした。昨年との違いとして、イロイロでは昨年は工事中のビルが完成し、また新しい工事が進んでいた。続々と新しい建物が立ち並び始めようとしている。それは明らかにフィリピンが発展している証拠であり、資料などでグラフや表を見るよりも分かりやすく、フィリピンが変わっていることが分かった。また、センターでの歓迎がパワーアップしていて、昨年も歌やダンスを見せてもらったが、今年は様々なアクティビティを用意してくれていて、センターの中でも青山学院の訪問プログラムについての関心が高まっていることが嬉しかった。そしてこの期待に応えられるように日本での活動をいっそう頑張ろうと思った。フィリピンを訪れた私たちがこれから高等部や社会にフィリピンのことをどれだけたくさんの人に伝えていけるか、最終的には高等部の支援するチャイルドを増やしていけたらと思う。



3年女子

### ・はじめに

わたしがこのフィリピン訪問プログラムに参加した経緯は、今後勉強していきたいと考えている医学に対して国際的な視野を身に着け、世界にある医療問題や衛生問題を実際に見たい、又、スポンサードチャイルド達が実際どのように生活をしているのかが気になっていたからである。

皆さんは「貧困」「フィリピン」と聞き、想像することは大抵、「かわいそう」「食べ物がない」「痩せている」「家がない」というワードが思い浮かぶのではないだろうか。もちろん私もその1人であった。またそれに加え、私の家族が支援しているスポンサードチャイルドから届く手紙の文面のポジティブなイメージとの貧困に対するネガティブなイメージとの食い違いに対する違和感もあった。フィリピンについて多くの事前学習を積み重ね、たくさんの本を読む中でもそのような印象が根深く私には残っていた。しかし、実際にフィリピンを訪ね自分の目でフィリピンの街並み、子供、文化を見てコミュニケーションを重ねていった中で、そのイメージは大きく変わった。この報告書では、皆さんに私が実際に見て、みんなとミーティングを重ね理解を深めたフィリピンの貧困、子供や日本との違いについて伝え、答えのない問題である私たちがすべき支援やその形について考えたいと思う。

### ・「貧困」の現状

皆さんは「貧困」にはいくつかの種類があることを知っているだろうか。今回のプログラムで私たちはイロイロ、ギマラス、マニラの三つの場所を訪れた。三つの場所全て「貧困」に苦しむ人々がいた。しかし、すべての場所が同じような貧困に困っているわけではなかった。

イロイロという場所では小作農の体制が残っており、収穫した作物を自分たちの食事に使う事はできるが現金収入はやはり少ないという。ギマラスでも同じように、一つ一つの家庭がココナッツの木や家畜を育てるという自給自足の生活を行っている。最低限度の家や食事は困っていないが、現金収入が少ないため常にギリギリの生活をするという貧しさがある。

しかしマニラ近郊の地域ではマニラの開発のために家を奪われ、追いやられ、スラムで生活することを余儀なくされた人々もいた。スラムには路上生活者も多く、安定した職もないため食事を常に十分な量をとれることはない人が多い。家も屋根と壁でただ囲われただけでとても狭く、その中に7、8人の家族が生活する家庭もある。ゴミも道に積み重ねてあり、トイレは近所の人と共同のトイレがいくつか家の外にあるくらいである。このように、衛生環境も悪く、最低限度の生活も難しく食料にもありつけるか分

からない生活をするという貧しさがマニラ近郊のスラムで生活する人々にある。

私が見た中では、フィリピンには最低限度の生活ができる貧困とそれすらも難しい貧困があった。

また、訪問する中でも感じたことは、すべての貧困という苦しい状態にあっても心からの「笑顔」があるということである。もちろん、私たちには見せていないだけで苦しい表情をしている時もあるのかもしれない。しかしそんなことも感じさせないほどの素敵な「笑顔」をみんな持っていた。

私が訪問する前にイメージしていた貧困はマニラ近郊のスラムのような最低限度の生活すらも難しいというパターンのみで、みんな苦しんでいる表情にあるのであろうという考えであった。皆さんが考えていた貧困も私と同じではないだろうか。こうしたイメージと現実との差が私たちとフィリピンの人たちとの間に誤解や食い違いを生み出しているのではないだろうか。私たちの勝手なイメージがフィリピンの人たちのニーズに合わない支援を行い、フィリピンを含む多くの発展途上国の貧困化をすすめ、「笑顔」を奪ってしまう「押しつけ支援」が現在多く行われてしまっている。

「押しつけ支援」をなくし、より良い支援の形を目指すには、数学の問題を解くときに全ての問題を同じように解くことができないように、貧困にいくつかのパターンがあるのならば、それぞれに応じた支援の形があるということを私たち支援側は理解しなければいけない。

#### ・「value formation」

私たちは、フィリピンの三つの場所に訪れると同時に、それぞれの地域の共同体が運営する施設であるセンターを訪問した。主にセンターはCFJ（チャイルド・ファンド・ジャパン）と連携しながら、大人から子どもまでに対する食事や衛生面の指導、健康診断や歯科検診、学習面のサポート、簡単な医療施設を保持するセンターもあり、応急処置などを行っている。また、スポンサードチャイルドの保護やチャイルド達とのコミュニケーションも行っている。国内にはCFJから独立し、独自で仕事を行えるくらい力をつけたセンターもある。要するにセンターはCFJからの独立を目指しつつ、行政的な仕事を担い、地域発達を行っている。

私たちはどのセンターを訪問しても子どもたちからの歌やダンス、食事などの温かい歓迎を受けた。

また、毎回センターでたくさんのセンタースタッフさんや所属する子どもたち、地域の人々とコミュニケーションをとる機会があった。センタースタッフさんとはセンターの仕事や地域のことについて、子どもたちとは一緒に折り紙をして遊び、自分の友達と話すように将来のこと、勉強のこと、趣味のことなど他愛もない話をたくさんできた。その中で強く感じたことは、みんな「笑顔」で私たちと「同じ」ということである。私たちはもちろんフィリピンの子たちと本質的に同じような生活はしていないし、普通に接してしまう事で不快に思わせたり、嫌みのように聞こえたり見えてしまうかと少し不安があった。もし、私が彼女たちのような生活をしていて同じ立場であつたら、心のどこかで引け目や悔しさ、羨ましさなどを感じてしまうと思ったからだ。しかし彼女たちはそんなことも感じさせないような素敵な「笑顔」で私たちと本質的にも「同じ」ように見えた。

では、なぜ彼女たちはそのように私たちと「同じ」ように見えたのだろうか。

一つの理由としては、全てのセンターで共通して行っている「value formation」という日本の自己啓発指導のようなプログラムである。具体的に言うと、子どもたちに自分たちが貧しいことをコンプレックスに思ったりせず「自分にしかできないことがある」、「他人と違って個性があつていい」という子どもたちが持つ「可能性」や「個性」をただ教えるだけではなく、実践し自分で感じることをできるようにするプログラムである。彼女たちはそのプログラムによって自信ではないがそれに近い、「自分が何のために

生まれたかの確信」「人とは違う自分だけの個性」を見つけているからこそ、少なくとも私には私たちと対等、私たちよりもはるかに高い志を持っているように見えたのではないだろうか。

また、センターにいた子どもたちの中には自分から LGBT であることを告白してくれた子もいた。そのような多様性も自分でも悩まず、周りの人も受け止め、肯定することができている環境に驚きを覚えた。もちろん自己啓発指導は学校教育において倫理や道徳の授業や、私たちの学校でいう礼拝、聖書の授業に値するものであり、フィリピンだけでなく日本を含む世界各国で行われていることである。しかしその重要性や、本質的な意味の浸透性などが日本を含む先進国はフィリピンには劣っているのではないだろうか。

私たち日本で生きる子どもは、自分たちの個性や人と違う事を認めることを恐れ、常に他人と比べあうことで小さい安心を積み重ね、自信としているのではないかと思う。それは先進国にある裕福さ、何でも手に入るという作られた状態からのスタートであるからではないか。その点、途上国はありとあらゆるものが自然状態そのまま、子どもたちがこれから自分たちが作らなければいけないという使命感もあると思うが、物事をなんの疑問もなく純粹に考えられるということがあるのだと思う。もちろん、私たち先進国で暮らす子どもたちにもこれからの社会を担い作っていく義務や責任はあるが、その分ミスをしてはいけない緊張状態にあり、一人ひとりの「個性」が失われていくのではないかと考えた。このような先進国にある問題点などを私たちはフィリピンの人々の行動や表情から学ぶことができ、自分たちも変わらなければいけないという考えを自分たちで見つけることができ、一種の「value formation」を教えてもらうことができた。

### ・「強さ」

私たちは、ダスマリニャスというマニラ近郊でスラムや過酷な生活を強いられている人々が多くいる地域のセンターにいた Kimberly という十八歳の女の子にあった。彼女の第一印象はショートカットで化粧も濃く、少し話ただけでもすぐ笑顔になり、とても明るい子だろうなという印象であった。彼女は医者になりたく、同じ夢を持っていたため沢山話をしようと思っていたのだが、なかなかタイミングが合わず彼女から話を聞くことはできなかったが、中等部生や先生方から彼女のいろんな話を聞くことができた。彼女は歓迎会でも一人でステージに立ち堂々と素敵な歌声を聞かせてくれ、全員でダンスをする時もステージに立ち代表してダンスの見本をしていた。しかし彼女はガンを患い、何回も手術を行ったそうだ。今は完治し元気になったそうだが、今の明るさからは感じられないような影の部分も彼女も持っていた。

Milleni という十八歳の女の子と私は沢山話をした。彼女は人前で歌ったりすることは好きではないシャイな性格であったが、歌ったり曲を作ることが好きで、とても真面目なクリスチャンであった。彼女は将来心理学者になりたいらしく、大学へ行きたいと言っていた。入学試験には落ちてしまったようだが、今再試験に向かって努力をしているようだった。シャイではあったが鼻歌を歌い、友達と話して笑う彼女にも彼女だけがもつ明るさを感じた。しかし、彼女もまた両親の離婚や複雑な家庭環境という影の部分を持っていた。また、スラム街を歩いた時に彼女の家も見せてもらった。彼女は今、妹と母親との三人暮らしているそうだ。昼間なのに電気をつけても暗く、一つのベッドを置いたらいっぱいになってしまう部屋。三人で寝るには狭く地面のように硬いベッド。日本で暮らす私たちには想像もつかないような生活環境であった。

「〇〇は勉強できるから」「××は勉強しなくてもどうせ点数いいでしょ」、このフレーズを高校生や中学生なら一回は聞いたこと、言ったことがあるのではないだろうか。もちろんそんな人はいないだろう。そう言われる人も、もちろん人には見えないところで沢山つらい努力をしているはずだろう。私はどこか心の中で、このようなことを笑顔や明るい面だけを見て、フィリピンの人たちにしていたかもしれない。彼女たちを含め、多くのフィリピンの人々は心のどこかに影の部分で絶対持っているが、その影を受け止め、その状況を苦しみそのままにせず、負けないようにどうにかして自分で変えようと「努力」することや「強さ」を持っていると思った。そのような点が彼女たちの「笑顔」や勉強に対する真摯な姿勢に現れているのだと思う。人に自分の影の部分である弱さを見せることはとても勇気のある行動だが、フィリピンの人々は弱ささえも見せず自分の「強さ」に変えながら生きているのだなと思った。この「強さ」や「姿勢」に、私は何か忘れていた純粋なものに逆に励まされ、私も努力しよう、頑張ろうという気持ちになれた。

### ・「幸せ」って何？

私たちはこのようなフィリピンの人々から感じ、学んだ事を踏まえ、途上国で暮らす人々の「幸せ」について深く考えた。

実際にセンタースタッフの方々や同年代の子どもたちに「What is your happy?」「Are you happy?」と聞いてみた。もし日本人に聞いてみたら少なくともすぐにその答えは出ないのではないだろうか。私にとっての「幸せ」は生活する中で起こる小さな「幸せ」が積み重なり、どんどん大きな幸せになっていくと考えている。人それぞれ「幸せ」についての考え方は違うと思うが、その「幸せ」を普通に生活する中で感じることはほとんどないのではないだろうか。自分が「幸せ」なんだという感じる時は、戦争の話やフィリピンなどの貧困に苦しむ人たちの話を聞いた時に感じる「人と比べての幸せ」が多いのではないだろうか。しかし、フィリピンの人々は「幸せ」ということを本当に純粋に考えていた。フィリピンの人々にとっての「幸せ」とは、この場所に自分が存在し、生きているということと考えている人が多かった。また、今の自分たちの生活について、確かに厳しいことはあるけれど、幸せであるとすぐに答えてくれた人が多かった。もちろん皆がみんな今の生活状況に満足しているわけではないと思うが、その言葉を聞き、フィリピンに対する支援や子どもたちについて考えたとき、「フィリピンの人々は今幸せと感じているのに、私たちが支援を続けるとこの幸せを壊し、変えてしまうのではないか。」という思いがこみ上げた。このとき再び「支援」についてどう考え、私たちはどういった姿勢で「支援」を行えばいいのかを考えた。

### ・私たちが行うべき「支援」とは

私たちが一番恐れる支援の形は、海外企業や他国からの「押しつけ支援」や上下関係が成立する支援、フィリピンが持つ自然の美しさや国民の「幸せ」がなくなってしまうような支援である。その中で私が考えた支援は大学制度の改変やエコツーリズムというものである。具体的に言うと、大学制度の改変は、日本でも行っているような大学入試に地域枠という大学卒業後、期限付きの一定期間、行政関連の職業への就職や奨学金制度や留学支援などのサポートをするものを導入し、フィリピンの人の力でフィリピンを開発し発展させていけるような状態を作れるようにするものである。また、エコツーリズムはタワーホテルやショッピングモールがあるような沢山あるリゾートではなく、その土地が持つ文化や特色、自然

をなくさず生かし持続可能なリゾートを作るということである。

またセンターや地域を訪問して感じたのは、コミュニティのサポートである共助は強くあるが保険制度や医療制度などの公助が本当に少ないということである。地域には大きい病院はなく、ほとんどが診療所程度で風邪や健診などの軽い応急処置くらいしかできない。このようにまた必要なことは行政と地域共同体の連携やコミュニケーションではないだろうか。

しかし、このようなことは私たちが政府に直接働きかけできるようなことではない。あくまでも国民である地域の人々がその土地の持つ風土の魅力を知り、力をつけ、政府に働きかけることが必要なのである。やはりその中で私たちができることはフィリピンの良いところ、どうしてよいのかをたくさんの人に知ってもらい、興味を持ってもらわなければならない。改めて、フィリピンのことについて広める活動はこれからずっと続けていきたいと感じた。また、今回訪問して強く大切だと思ったことは支援する側もされる側もお互いが暮らしの点ではなく、想いが対等になることであると思う。私がフィリピンの人たちを見て励まされ元気づけられたように、お互いを認め高めあえるような関係になることが大切なのだった。このプログラムに参加し、たくさんのことを学べたことへの感謝をこれからの行動をもち、フィリピンの人たちと同じ場所に立ち、同じ方向を向く人が少しでも増えるよう活動しながら、その人たちともまたフィリピンの人たちにも私たちにとってもより良いものとなる支援の形を探していきたいと思う。



3年女子

### はじめに

私たちは今回のプログラムで、たくさんのものを見て、たくさんの人の話を聞いて、多くのことを学んだ。自分たちが感じたことや学んだことを日本に持ち帰り、より多くの人に知ってもらいたいと思うのにどれだけ誠実に言葉を選んで伝えても、ありきたりのメッセージにしか聞こえないかもしれない。それでも私たちには出会った責任と関わり続ける義務がある。ホントウのことを知っているものとして少しでも多くの人にホントウのことを伝えられることができたと思う。そしてこれが今後の私たちの活動の目標でもある。

### 無意識の差別

貧困という言葉聞いて多くの人が思い浮かべるのは栄養失調、飢餓、感染症などという言葉で、イメージだと痩せ細った子どもたちのモノクロの写真ではないだろうか？

私も上に挙げたようなものを想像するうちの一人だった。フィリピンに行く前に何度もメンバーと事前学習を行い、貧困にも様々なケースがあるということ学んだつもりだった。しかし実際現地に行ってみると食生活は十分満たされていたし、ほとんどの子がケータイを持っていたりするのを見て、“案外普通の生活をしてるんだな”と思うと同時に、行く前はフィリピンの人たちは普通じゃない生活をしていると決めつけていた自分がいたことに気づいた。私たちは常に自分たちの生活を基準において普通とか普通じゃないとかを決めているのと同じように、貧困という言葉に対しても自分たちが抱くイメージをあてて勝手に作りあげている気がする。差別というのはこういう小さなところから無意識に始まっているのかもしれない。

### 国は違えど

ある島でちょうど私たちと同じくらいの男女四人に出会った。彼らはクラスメートなだけあって仲がいいなという印象を受けた。牛がいると「あっ、あれお前じゃん!」と言ってみたり、男子が木登りを始めると「どっかの動物園からサルが迷い込んできたみたいね」などと冗談を言い合っていた。冗談を言い合う姿は日本の高校生となにも変わらなく、より彼らを身近に感じる事ができた。またしてもそこで自分が彼らに対してフィルターをかけていたことに気づいた。確かに私たちと彼らが持つバックグラウンドをはじめ様々なものが違うが、同じ高校生であることに違いはない。けれど、まだまだ無意識の

差別をしてしまう自分がぬぐいきれないのも事実だ。

### センターの役割

二日目から四日目にかけて私たちはセンターと呼ばれる支援活動の拠点に行き、現地の子どもたちと交流をするなかでセンターの役割を強く感じた出来事がある。それは四日目のダスマリニャスという、首都のマニラから南に30キロほど離れた地区にあるセンターで出会った子どもたちとの出会いだ。どの子どもたちも少しませていたがとても人懐こく、別れがたかった。彼・彼女らが私にお別れのハグをしてくれた時、日本の同じくらいの年齢の子どもたちに比べるとだいぶ細く、表面化されていない貧困を感じる瞬間だった。こういった目に見えにくいところでの貧困が及ぼす影響の対象には必ず子どもが入る。それは自分たちの生活に不満を持っていたとしても、その生活を変えられるほどの経済力や知識を十分に持っていないということが大きい。そこで社会的弱者である子どもたちを守っていくのがセンターの持つ大きな役割である。

### カミーレの言葉

私たち高等部が支援しているスポンサードチャイルドの一人でこの春から大学生になるカミーレという子がいる。彼女と仲良くなれたのでたくさん話を彼女から聞くことができた。引率の先生から、昔はカミーレが恥ずかしがり屋で引っ込み思案な子だったけれど、会うたびに明るくて積極的な子になっていったと聞いていたので、彼女に直接そのことについて尋ねてみた。「どうして変わったの？自分を变えることって難しくない？」と聞くと、彼女は少し照れながらも私をまっすぐにみて

「自分を变えることは思ってるほど難しくないのよ。なぜなら変わりたいと思うってことはその瞬間から以前の自分より変わっている証拠だから。それで誰か一人でもいいから自分の変化に気づいてくれたり、自分のことを肯定してくれたりする人がいたらその人に見てもらうために頑張ろうと思えるの。私の場合は、その一人が親友だったの。親友に褒めてもらえることがうれしくて頑張っていたら自分でも気づかないうちに変わっていたの。そのくらい自分を变えるって簡単なことだと思う。」

と答えてくれた。さらに続けて、

「それよりも難しいのは環境を变えること。これは私たちみたいな子どもじゃ話にならないし、大人だって限られた大人しかできないことだと思う。みんながみんなに平等にチャンスが与えられるにはどうしたらいいんだろうね。私にもあなたにも難しすぎる話だわ。」といった。カミーレのこれらの言葉は日本に帰ってきた今でも忘れられない言葉の一つである。カミーレは四畳ほどの家におばあちゃんと二人で今は暮らしている。テレビはあるが電気は通っていないので、部屋の中は暗いような家で、私たちから見ればかなりひどい環境にいるように思われるが、カミーレは私たちにこれが私の家なんだと堂々と紹介してくれた。カミーレの一つ一つの言葉や行動に自信があるように感じたのは、彼女の親友の存在や誰かから肯定されることで自分の中にも芽生える自己肯定の意識が関係していて、身近な人が与える影響力の大きさを改めて感じた。

### 教育の重要性

フィリピンで出会った子どもたちに勉強は好きかと聞くとみんな必ず好きだと答えた。逆になんで勉強が嫌いなのかと聞かれるときもあった。フィリピンの子どもたちは学ぶということに対して、とても意

欲的だった。彼らに勉強を好きな理由を聞くと、知らないことを知ることが楽しい、将来は大学に進みたいと思っているからなど、様々な理由が出たが、ある子は父親と母親になるためといった。その子は好きな人と幸せな家庭を築くことが自分の夢だから、そのためにはたくさんを知っていなければならないと自分の両親を見て思ったそうだ。たしかに、読み書き計算などの知識上の学習だけでなく、自分の体のことについて知る性教育の普及も貧困の地区が抱える大きな課題である。これはティーンのカップルが親や周りの了承を得ずに結婚し、いつの間にか妊娠しているというケースが非常に多いという現実がある。私たちが訪問したある家では16歳と19歳の夫婦がいて本当に驚いた。日本よりも男女の距離が近かったり、結婚ということに対して堅苦しい手続きがいらぬというのが一つの大きな理由なのかもしれない。しかし医学的な面からみても、未熟な身体で出産を迎えたりすることは母子ともに命のリスクを負うことになりかねない上に、子どもの育て方を知らない私たちのような世代が子育てをすると、子どもがいうことを聞かないことに対してストレスを感じたり、答えの見えない毎日に対しての不安から家庭内暴力が起こるケースもある。こういった視点からも性教育などの普及を高め、人生設計や家族計画などをもう一度子どもたちに考えてもらう機会を設ける必要がある。

### 誰かの生活を変えることへの責任

今回訪問した島々は、数年前から世界から新たなリゾートとして注目され始めている。それにともない、ギマラス島とイロイロ島をつなぐ新たな橋が架けられることになっている。私たちはこの橋の問題について何度も議論をした。ギマラス島は緑にあふれるとても自然豊かな島で住民同士の絆も深く、まるで一つの家族のようだった。一緒に行った初等部の先生は、昭和の頃の日本を見ているみたいだとつぶやいていた。経済的な意味ではない、本当の豊かさを持ったこの島に開発の手が入ることで、その豊かさが失われてしまうのではないかと私たちは危惧しているのだ。おそらくギマラス島にはこれからたくさんの海外資本が参入し、ホテルが建てられ、リゾート化が進むだろう。ホテルが建設されれば旅行客も来るし、その人たちがたくさんお金を落とすとしていってくれるからいいのではないかと考える人も多いだろう。しかしリゾート地で儲かった分というのは、当然そこを所有している日本や中国などの企業の利益になるため、住民がリゾート地の恩恵を受けることはないのだ。それなら、リゾート地で住民も働けばいいのではないかという意見もあるだろう。残念なことに、この建てられたホテルの従業員のほとんどはその海外の企業からつれてこられるため、わざわざ現地の人を募集しなくてもすむのだ。さらに、旅行客がくるということは治安の悪化にもつながり兼ねない。たいていリゾート地には旅行客向けのクラブなどが併設施設として作られるため、今までクラブの存在を知らなかったギマラスの人々(特に私たち世代の若者)もそれを知ることになる。今まで自然と共存し、自給自足同然の生活をしながらも、不自由を感じなかった生活がそういったものを見ることによって、一気に退屈な日々を感じたりするだろう。また、未成年の酒やたばこなどを助長する可能性もある。一見よいことのように見えるリゾート化計画は、ほんの一部の人々にしか利益をもたらさない割に、ギマラスの人々の暮らしを大きく変えてしまうだろう。誰か一人の生活を変えるということは、たいへんな責任がある。その変える対象が島全体というのなら、もっと大きな責任がある。私たちはもっと開発という行為に対して責任を感じるべきなのではないか？

本当の幸せとは？

「あなたにとっての幸せとは何ですか？」

私はこの質問を出会った数人の大人に尋ねた。すると「いつも幸せだから、そんなもの特にないわ。あなたは？いつも幸せじゃないの？」と逆に質問されて私は言葉に詰まってしまった。幸せとはもっとシンプルなものなのかもしれない。幸せの基準とは何を持っているかではなく、自分自身がなにを幸せだと思うのかということだと改めて気づかされた。幸せの定義なんて人それぞれだが、富を得れば得るほど幸せに求めるものが高次元になり、私たちは幸せということに対して鈍感になってしまっている。周りの小さなものを見落としがちで自分が少し恥ずかしく思えた。

### 子どもたちを支える“夢”の存在

フィリピンの子どもたちの多くが自分の将来に対して夢を持っている。それらは医者、先生、モデルやデザイナーなど様々だ。一見これは当たり前のように聞こえることだが、実はすごいことだと思う。フィリピンに行く前に、私の周りの友達15人に将来の夢を聞かせてほしいと頼んだら、答えられたのはたったの4人だった。おそらく答えられなかった11人の中には、実現できるかできないかの夢を人に教えるのは恥ずかしいと思い、答えなかった人もいるだろう。だが、夢をかなえられるかどうかなんて誰だって分からないのだ。にも関わらず、恥ずかしがりもしないで自分の夢を即答してくるフィリピンの子どもたちの心には、野望にも似た意志があると感じた。ある一人の子は“dream enables me to have passions”と答えた。

Passionとは情熱という意味が日本ではスタンダードだが、怒り、憎しみ、情熱などの感情を意味する激情という意味もある。あの子が言っていたのは、激情の意味もあるだろう。彼らのなかには電気が通っていない家だったり、下水道がちゃんと配備されていない家に住んでいる子も少なくない。私たちから見たら壮絶なバックグラウンドを持った子どもたちだからこそ夢にひたむきであり、彼らにとって夢は単なる目標ではなく、自分の力ではどうしてもできない現実から抜け出すための原動力なのだろう。彼らの夢をできるだけ多くの子どもがかなえてあげられるようにするためにも、高等部として支援チャイルドを増やしたいというのは私たち全員の意見だ。

### 誰のためのなんの支援か

日本はODA(政府開発援助)では途上国に対し、経済面では加盟國中第四位につけるほどの支援をしているが、実際現地の人について聞いてみると、彼らが必要としているのは経済面での支援ではなく、技術面での支援だということが分かった。例えば、ギマラス島にはコンクリートではなく木などの簡易な作りの家が多く、台風の季節である9月にはほとんどの家の屋根が飛ばされる、家が壊れるなどの被害を受ける。昔からこのような被害を受けてきたにも関わらず、なぜ人々の家が変わることはないのか。それは誰も建設に関する知識をもっていないからだ。日本やアメリカ、中国などの世界でも屈指の建設知識をもった国からの技術面での支援により、この問題は解決できると私は考える。ただ運転資金を与えるのではなく、運転を開始させるためにはなにが必要か。現地の人にはなにが足りないのかを十分に知った上での支援をするべきである。押しつける支援ではなく、寄り添った支援を行なうためにも支援のあり方をもう一度考えてみるべきだ。

共に歩むものであり続けること

冒頭でも書いたように、私たちは高等部が支援しているチャイルドに実際に会ったり、貧困というものの実態を自分たちでそこに行くことで学んできた。実際に行くことは、いい意味での裏切りがたくさんあった。自分たちが思っていたほど現地の人々は不幸ではないし、むしろ自分たちの心の貧しさを痛感するほどだった。ただ、これをいい思い出だったと一時のことにして、また元の生活に戻っていくのはあまりに薄情で無責任である。私たちのこのプログラムはチャイルド・ファンド・ジャパン、高等部をはじめ、たくさんの人々のサポートを受けてこそ行なわれたプログラムである。そのサポートに対して答えること、フィリピンの子どもたちと出会った責任など、私たちにはこれからもこの“貧困”という問題に対して関わり続ける義務がある。そしてまた高等部生もクリスマス献金を通して彼らを支援しているので、彼らについて知る権利がある。だから、その権利を最大限に使っていつでもなんでも聞いてほしいと思う。

そして頑張れ!という〇〇してあげるという立場からではなく、頑張ろう!というような一緒に〇〇するという立場にたって、同じ世代として私は彼らと共に歩み続ける者でありたい。



3年女子

### はじめに

みなさんは「貧困」ということにどのようなイメージを持っているだろうか？

なんだか汚くてまともにご飯も食べることができず、子供は学校に行けないため勉強ができない。私は貧困地域で暮らす人々のことを何も知らないにも関わらず、自分より劣っていると勝手に下に見て、自分の中でイメージを作っていた。だが、それは大きな間違いだった。このプログラムに参加して、実際に現地の人々と話して、食事をして、友達になって、自分の価値観が新しくなったと思う。フィリピン訪問では3つのセンターを訪れた。いろいろな地域にあるセンターは、健康、教育、生活など様々な面から子供たちをサポートしている。そのセンターを支援しているのがチャイルド・ファンド・ジャパンだ。青山学院高等部はチャイルド・ファンド・ジャパンを通して3人の子供たちを支援している。私は、いくつかの地域を訪問する中で「貧困」には様々な種類があり、地域ごとに抱えている問題も大きく違うということを知った。そんななかで、対照的だったのがギマラスとダスマリニャスだ。

### センター訪問

イロイロから船で30分ほどのところにあるギマラス島。船から降りると魚の香りがした。ギマラス島は漁業が盛んで、マンゴーがおいしい。自然が豊かで、暮らしている人々はみな、ゆったりとしていて、時間がゆっくりと過ぎているような感じがした。

センターにつくと、5、6歳の女の子たちが私の手をひいて家やセンター内を案内してくれた。ギマラスの幼い子供たちはまっすぐな目をしていて、人懐っこく、本当に可愛かった。私は、インジェルという女の子と仲良くなった。彼女はまだ英語が話せないため、まともな会話をすることはできなかったけれど、一緒に遊んだりご飯を食べたりするうちに言葉は通じなくても、心の距離はとても近くなったと思う。日本に帰国した今でも、彼女を思い出して、また会いたくなるほど何か特別な魅力があった。

私はギマラスでもう一人の少女と仲良くなった。名前はフリンセス。彼女は私と同じ年で、島に着いた時から積極的に話しかけてくれた。趣味や、好きなアイドルの話、将来の夢などたくさんを語り合った。仲のいい男子とお互いのことをいじり合って、「あなたひどい！」などと言いながら追いかけあっている姿は日本の高校生と何も変わらない。暮らしている環境は違うけれど、自分と同じ普通の高校生なんだと感じた瞬間だった。彼女の夢はジャーナリストになることで、将来は日本か韓国で仕事をしたいそうだ。ギマラスを離れなくてはいけないのは悲しいけれど、自分の夢をかなえるためには島を出る

という選択肢しかないのだと言っていた。

そんなギマラス島は現在、新しいビーチリゾート地として注目されている。2018年にはイロイロとギマラス島を結ぶ大きな橋が架かる予定だ。そうなれば、さらにリゾートとして注目され開発が進むだろう。開発されれば島は賑やかになり、店が立ち並ぶことにより雇用が増えるなどのメリットがあるかもしれない。

だがそれ以上に、ギマラスの美しい自然が破壊され、地元の人々の生活が海外から流入してくる企業によって脅かされることが懸念される。わたしは、ギマラス島が海外資本企業によりビーチリゾートとして開発されることに反対だ。

だが、もう開発が進みつつある状況の中で現在のままのギマラス島であり続けることは不可能だろう。外資系企業が島に入ってきて、開発が進む中で彼らが本当に守らなければいけないものは何なのか。そして、ギマラス島の良さを客観的に見ることができ、その地に住まない人として、何ができるのかを今後も考えていきたいと思う。

ダスマリニャスにある都市型スラムの地域を訪問した。道は細く、迷路のように入り組んでいる。トタン屋根の背の低い建物が並んでいる。どこを歩いても似ていて、一度入ったら出られない感じがして、歩いているときになんだか恐怖心を覚えた。生臭い悪臭がする。下水も上水も整備されていない。ギマラス島とは大きく違う雰囲気に驚かされた。

センターにつくと、子供たちがダンスや歌を披露してくれた。子供たちはみな笑顔で、いきいきとしていて活発だった。そんな楽しそうにしている子供たちだが、この地域にセンターができる前は、家庭内の児童虐待率は8割を超えていたそうだ。その日を暮らすのがやつの生活をしている親たちはストレスから酒や薬におぼれ、子供に暴力をふるってしまっていた。また、親自身たちもきちんとした教育を受けられないまま育てられたため、どう子供に接していいのかがわからないのだ。私は、元気な子供たちからはそのようなことは想像できず、とても驚いた。センターは子供たちの精神面のサポートも行っている。その中の一つに自己啓発プログラムがあり、歌やダンスを人前で披露したり、子供たち自身で自分たちの生活についてなどを話し合い、自分の考えを発表するなどのことが行われていた。自分の考えを持ったり、人前で何かを発表することは、自分への自信につながると思う。

「Free From Violence」のハンドスタンプを集めた壁がセンターの前にあった。親からの虐待に対して子供たちが自ら声を上げるというのは勇気ある行動だと思う。去年、高等部ではグローバルウィークに高等部生のハンドスタンプを集めて一枚の絵にし、日本から彼らの活動に賛同の意を表した。



このことはとても意義のあることだと思う。今年のグローバルウィークでも彼らの活動やフィリピンについて知ってもらえるように活動していきたい。

私は、フィリピン訪問プログラムを通して一番印象に残っていることは、センターで出会った子供たちは人と自分を比べていなく、とても幸せそうに暮らしていたということだ。衛生や食事インフラ、教育などの環境は私たちに比べ、決していいと言える状況ではなかった。物質的な豊かさはなかったが、人々の心の豊かさを感じた。

ダスマリニャスのスラム街にあるセンターで出会った女子高生の子が住んでいる家を訪問させていただいた。そこは下水道も上水道も通ってなく、部屋には小さな電球が一つある薄暗い三畳ほどの広さしかない部屋に暮らしていた。日本からやってきた、まだ会ってまもない私たちに自分の生活環境を恥ずかしがることなく堂々と紹介してくれたのだ。私はそのことにとっても驚いた。私が同じ状況にあったら、自分と相手を比べてしまい、恥ずかしく思い、紹介することなんてできないだろう。

日本人は常に人と比べて自分を判断していると思う。「特技は何？」と聞かれたときに多くの人は、「特技はない」または「〇〇さんに比べたら下手だけど～」と言うのではないだろうか。だが、センターにいる子供たちは違った。人と比べてどうだというのではなく、自分の中で得意ならば特技なのだ。自分を人と比べて評価しないということは、多様性を認め合うことにもつながると思う。センターに行くとき男の子が女性らしい恰好をしてみんなの前で得意げにダンスを披露してくれた。また自己紹介でゲイだと話してくれた子もいた。私はLGBTに対する子供たちの理解と受け入れている様子に驚いた。それぞれが自分の個性を出し、互いに認め合っている環境ができていくのだ。

また、私が出会った子供たちは将来の夢を持ち、夢に向かって自分が前進するために多くの努力をしていた。彼らは自分の将来に希望を持っていた。

そんな彼らに比べて私たちはどうだろうか。自分と他の人を比べ、常に周りにどう評価されるか気にしながら自分を出せずに生活している人は少なくないだろう。彼らを「かわいそう」だと思い、憐れむことなんておこがましいことだと強く感じた。私たちは彼らに対して尊敬すべきところがたくさんあるのだ。そんな彼らに私は「強さ」を感じた。自分の芯がしっかりとあり、自信があるように見えたからだ。はじめ私は、ただすごいなと思っているだけだった。そのことをある先生にお話しした時、その「強さ」は彼ら自身がもともと持っているものから感じる「強さ」ではなく、自分の弱さを隠していないところからくる「強さ」なのではないかということをおっしゃっていた。その言葉にはっとさせられた。うわべの様子を理解しただけで、考えることを止めてしまっていた自分に気づかされた。

センターではリーダーシップやエンパワーメントを育てる活動が行われている。人前でダンスを踊ったり、ディスカッションをしたりする活動だ。人前で何かを発表し、拍手され称えられたとき私たちは自分が人に認めてもらった感覚を得て、それが自信につながることはないだろうか。これらの活動は子供たちの成長に大きな役割を果たしている。

## 貧困ビジネスについて

「貧しく、かわいそうな発展途上国の人々を助けよう」そのようなイメージを人々に持たせ、行われてきた発展途上国への支援。それらは「貧困ビジネス」と呼ばれ、巨大な産業となっている。私たちは「支援＝人助け」となっていることを信じて社会貢献をうたっている企業を応援したり、NGOに募金をしたりしている。だがそれらの行為は発展途上国の人々を苦しめることに繋がっているかもしれない

のだ。私たちは騙されてはいけない。なにが本当の意味での「支援」なのかを自分たちで考える必要があるのだ。

貧困がビジネスとなった現在は貧困が商品なのだ。貧困がなくなってしまうたら貧困ビジネスがなくなってしまう。それを恐れて、貧困の根底から解決することをしようとせず、支援に依存し続けるシステムを作り上げていないだろうか。支援の目的はその国や地域に支援が必要としなくなることであるはずだ。持続可能な社会を作るための支援が必要だ。その一つに、エンパワーメントとリーダーシップを育てることが挙げられる。自分たちで問題を発見し、変えていく力を持つことは持続可能な社会を作っていく中でとても重要なことだ。

では、私たちにできることは何なのだろうか。現在私たちにできる本当の「支援」とは、「被支援者のことを知ろうとすること」だと考える。被支援者のことを知り、何を望んでいるかを考えれば本当の意味での「支援」が見えてくると思う。そして、支援者側が得をして被支援者の状況を悪化させるような支援となってしまうかを判断することができるだろう。私たち一般人が「支援」についてより興味を持ち、その仕組みや影響について考えることが大切だと思う。また、彼らのことを知っていく中で私たちは多くのことを学び、現在の自分たちを見直すことにもつながるだろう。

高等部でより多くの生徒にフィリピンでの私たちの学びについて知ってもらい、一人でも多くの子供たちを支援できるよう、今後も活動を続けてきたい。



3年男子

大きな政府と小さなセンターのどちらが住民のためになっているのか

### 1. 今回のプログラムの趣旨

僕がこのプログラムに申し込んだ動機は、「貧困」というものを見てみたかったからだ。フィリピンに行けば、ニュースでよく報道されているまさに「貧しく困っている」そんな大雑把なものではなく、その土地を実際に訪れ、そこに住む人と話すことで、リアルな貧困を知ることができると思ったからである。僕がこのプログラムに参加する前までは、僕のフィリピンに対するイメージは「貧しい」、「バナナ」、「マンゴー」だった。実際、僕らの献金はチャイルド・ファンド・ジャパンという NGO 団体を通して貧しい子どもたちを支援することに使われているし、バナナなどのフルーツは大型農園で収穫され、安値で日本に輸出されているので、そのイメージは間違っていない。だが、フィリピン全体が貧しいかといわれるとそれは違う。フィリピンは今、東南アジア諸国の中で一番経済成長率が高く、マニラを訪れたときは東京にも引けを取らない高層ビル群があり、それは日々拡大している。にもかかわらず所得的にみると、富裕層が1%、中間層が9%に対し、90%もの貧困層がいて、貧富の格差がとても激しい。経済格差が広がった理由を政治的に解き明かすなら、「植民地時代からの小作制によって地主と小作人に身分が分けられたから」、「政府が外資系企業を優遇し過ぎたため、市場をそれらに独占されて、国内企業が伸びなかったからだ」というのが一般の通説だ。

僕は「貧困問題を効果的に解決できるのは、小さな NGO 団体などの援助よりも、強い力を持ったガバメントである。」という仮説をもって、フィリピンの地に踏み込んだ。なぜなら、小作人を地主から開放するという「農地解放」と、優秀な人材を海外に流出させないための「賃金上昇、雇用創出」という2つの貧困からの脱出に欠かせないステップは、大きな政府によってしか実現できないものだと考えたからである。今回のプログラムでは、イロイロ、ギマラス、ダスマリニャスの3つの性格の違う貧困地域を訪れて、その地で貧しい人たちを支援している施設であるセンターを訪問する機会をいただいた。ここでは、大きな政府と小さなセンターがどのような影響をその地の住民たちに与えているのかを記したい。なお、ここではフィリピン国政府とフィリピンに81ある州の行政を「政府」と扱っていく。

## 2. 訪問先について

先ほど述べた通り、今回の3か所の訪問先はそれぞれ性格が異なっており、生活や労働形態をはじめとして貧困の種類が違った。事前学習により、そのことは少し頭に入ってはいたが、実際に訪れてその土地の風景の違いに大きく驚かされ、「様々な角度から貧困というものを考えなければいけない」という意識が生まれるきっかけとなった。

一番初めに訪れたイロイロは、のどかな田園地帯で小作制が根強く残っている地域だ。しかし、最近ではマニラ、セブに続く第3の留学都市にしようと、政府により開発が進められていて海外資本の集中投下が行われている。僕たちが空港からイロイロ市街に向かったときに気づいたことだが、大きな通りには信号が少なく、市街地につくまで街灯も少なく、暗く寂しい景色が続いた。これはイロイロの開発が住民のことを無視して人工的に行われたため、大通りがありすぎないために信号は少なく、道が交差する地理的に栄える場所が少ないため、結果的に寂しい通りとなってしまったのだ。しかし、地主が「SM (シューマート)」というフィリピン全国地区にある大型ショッピングモールを誘致して2015年にオープンしたのを発端として、イロイロの中心街はとても明るく華々しい街並みとなっていた。このSMを訪れたとき、日本で見たこともないほどのショッピングモールの大きさに驚かされ、そこには「Starbucks」や「North face」、「Adidas」など海外の大手企業の店が軒を連ねていて、多くの人で賑わっていた。しかし、そこに地元の人と思われる人は少なく、観光客と思われるような身なりの人ばかりだった。今回訪れたイロイロのバランガイ (住民街) は中心街から車で20分ほどのところで、中心街の開発からは遠く離れていて、この二つの地区は接点がないと肌で感じた。そこには地元の郷土料理を提供する店や、新鮮なフルーツや肉、魚を販売しているマーケットがあり、周りには田園地帯が広がっていて、そんな中にイロイロの貧しい子どもたちを支援しているセンター#41があった。そこのチャイルドの親は、小作農やトライシクルというタクシーのような交通手段のドライバーをしているケースが多く、日々の衣食住は充足しているが事故や病気など不測の事態に金銭的に対応できないというハイリスクな生活を送っている。また、チャイルドにどんなに勉強したいという気持ちがあっても金銭的な問題から大学を諦めなければならないということを知った。このように、イロイロは急激に開発が進む地域とそれにおいていられる貧困地域の二極化が激しい地域だった。

3日目に訪れたギマラス島は、イロイロとは4キロほどの海峡をはさんで反対側に位置する島で、その島に向かう交通手段はいまのところアメンボのような形をしたバンカーボートしかない。島内には、ほかの街で多く見かけた「Jollibee」などのファストフードなどのチェーン店が一切なく、マーケットや小売店などの個人経営の店がほとんどで、島の外の世界とは遮断されていると感じた。また、港の近くや、海岸部では漁業がおこなわれ、島の内陸部ではマンゴーをはじめとしてコメ、ココナッツなどの農作物が育てられ、島の中で自産自消のシステムが成り立っている。他には大工や日雇いの仕事が主流で、島民の日収は100ペソ (220円) 程度である。島の内陸部には、道路の舗装が行われていないなど、インフラが行き届いていないと感じる部分も多々あったが、井戸など豊富な自然を利用して、不自由なく生活を送っていると感じた。それぞれの家庭が菜園や養鶏を行っていて、食べ物に困っている様子もなかった。ただ、チャイルドの中には、親が島の外に出稼ぎに行っているケースも少なくない。僕のギマラスで仲良くなった高校生男子の父親はイロイロ

で小作人を、母親はマニラで看護婦をしていて、母親には3年間も会ってないと寂しがっていた。また、島内には州立の大学しか大学がなく、大学進学や就職をきっかけに島を出て家族に仕送りをするというもう一つの生活パターンが近年見られるようになってきた。しかし、このようにのどかで外から遮断されたギマラス島にも、資本主義の波は押し寄せている。2014年に、フィリピン開発銀行と市中銀行の融資で日系企業により風力発電施設と対岸へ電力を送る送電ケーブルを建設する100億円をかけたプロジェクトが完了し、これがギマラス島にとっての外国資本流入への転機となった。来年（2018年）までには中国によるODA（政府開発援助）という形で、イロイロとギマラスをはじめとするビサヤ3島をつなぐ橋の建設が完了すると見込まれており、それをきっかけに以前から綺麗なビーチなど観光資源が注目されていたギマラスのリゾート開発が始まるとされている。急激に開発が進み、島の需要と供給のバランスが崩れるともう元の自給自足の生活には戻れないと考えられており、今後のどのような発展を遂げ、どのように島民と共生していくかが注目されているのが、ギマラス島だ。

3番目に訪れたダスマリニャス地区は、フィリピンの首都であるマニラから南に30キロに位置し、今回訪れた中で一番我々が持っている「貧困」というイメージに近いところだった。街並みはこれまでの訪問先より雑然としており、そこで生活している人々も忙しそうで、街の中でちらほら喧嘩などのいざこざがあることがうかがえた。大都市の首都マニラに近いこと、国家産業と海外企業誘致のブームの影響を受けて、ダスマリニャスは工業都市となった。今回僕たちが訪れたスラム街は大きな通りから路地に入ったところにあり、迷路のように入り組んでいた。これは政府の都市計画によって追い出されたマニラ近郊で生活していた住民たちが、計画性もなく住み始めたためだといわれている。このため、スラムには上水道が整備されておらず、生活用水は購入するしかない。また、洗濯や汚水などの下水は処理されることなく川に垂れ流しにされ、ごみを拾ってお金に換えて生活する人もいるため、家の前にはごみが積んであって非常に不衛生だった。家自体も簡素な作りでトタンや屋根の代わりにシートを代用している家もあり、4畳ほどの小さなスペースに7人家族で住んでいる家もあるくらいだった。電気はおそらく盗電したものが通っており、小さな灯りやキッチンがあり、トイレは共用だった。大きな病院もマニラ市街にしかなく、緊急の事態にも高速道路で1時間ほどかかるという。スラム街の周りには多くの国営・多国籍企業の工場地帯が広がっていて、有名なものだとヒュンダイや、ヤマハなどの工場がある。スラムの住人はこれらの工場や道路工事現場などの日雇い職、ジプニーやトライシクルなどのドライバーなどをすることで生計を立てており、給料が低く不安定な貧困状態に陥っている。このように不衛生で衣食住に困っている状態に陥っている、それがダスマリニャス地区だ。

### 3、センターの地域への貢献

我々の日々の献金は、チャイルド・ファンド・ジャパン（CFJ）を通してフィリピンの子ども達の支援に使われていることは前述したが、実際にどのように使われているかは初等部の頃から毎月献金している僕でも、このフィリピン訪問プログラムに参加するまでは知らなかった。CFJには約5500人の支援者がいて、フィリピンを中心としてネパール、スリランカの子どもを支援している。フィリピンの支援チャイルド数は約4100人で、フィリピン国内に支援の協力センターが14ある。CFJが取り組んでいる支援分野は主に「教育」、「子どもの保護」、「保健・栄養」、「家族の生活改善」、「自己啓発」、「住民主体の組織づくり」の6分野に分かれている。今回の訪問プログラムの

中で3か所のセンターと自立した一つのセンターを訪れた。そこで得た具体例とともに、センターがどのように地域社会に貢献しているかを説明していきたい。

まず、「教育」に関しては、僕はセンターの役割の中でも最も重要だと感じたものだ。フィリピンは、公立なら小学校から高校までは無償で通うことができる。それにもかかわらず、学校に通うことができない子どもがいる理由は、勉強に使う学用品や給食費、さらには学校までの交通費を払うことが難しい家庭があるからだ。そのため、今回出会ったチャイルドの中には、ノートなどの文房具や宿題で使用する共用のPCなどの代金を支援金から出してもらっている子がいた。他にも、学校の勉強についていけない子ども達が挫折してしまわないように、放課後にセンターの職員や年上のチャイルドが勉強を教えたりすることもするらしい。また、ギマラス島ではセンターに行くのが大変なチャイルドのために、街中の塾と連携して補習の授業を組んでもらっている。また、子どもたちがセンターで遊んでいるのを見たとき、センターの指す教育は勉強面だけではないと感じた。センターは、日本でいう学童のようなものにも感じ、小さな児童は集団で遊ぶことによって他人とのかかわり方を学んでいると感じた。これは、のちに説明する子ども達の自己啓発にもつながるものだ。

「子どもの保護」については、国連が定めた子どもの権利条約（「生きる権利」、「守られる権利」、「育つ権利」、「参加する権利」）に基づいて行われていると聞いた。僕にとって、この支援活動の一番わかりやすい例になったのが、ダスマリニャス地区での家庭内暴力の問題だ。この地区では、習慣として昼の仕事で疲れた父親が家に帰ってきてから子どもにDVや言葉の暴力を行使してしまう件が多く、実際、元チャイルドだったセンターのスタッフもセンターが来るまでは、親からの暴力を受けていたと言っていた。実際、数年前の調査でも8割の子どもたちが親から暴力を振るわれていたことがあるという結果が出ていた。センターは、それが間違っているということ子どもだけではなく、親にも説明することによって少しずつ問題が改善していき、子どもの保護という意識をセンターからスラムの外へ広げていくことで子どもの権利を守っている。

「保健・栄養」についても、比較的食べ物が足りている貧農地帯のイロイロやギマラスよりも衛生環境が劣悪なダスマリニャスのほうが優先的に支援が行われていたと感じた。補食プログラムや年1回の健康診断、健康に関するセミナーや、風邪を引いた時の対処法（布団などで体を暖め、経口補水液などで十分に栄養と水分を摂る等）などの活動が行われていた。また、道にごみを捨てない、などの地道な努力も衛生状態を改善するための重要なステップだと感じた。

「家族の生活改善」については、どのセンターでも積極的に行っているらしかった。というのも、家庭の経済状態がよくなれば、その分の利益をほかの問題の解決に費やすことができるからだ。イロイロにあるセンターでは子どもや家族に裁縫をはじめ、収支報告書の書き方・読み方や緊急治療のトレーニング、経営論など様々な知識や仕事のスキルを教えていた。歴史的に見ても、フィリピンの人たちは契約書によって先進国や多国籍企業に騙されて損害を被ってきたので、難しい文書の読み方などはそれらに対抗するための地道な努力だと感じた。

「自己啓発」という活動が、長期的に見て一番貧困から抜け出すのに有効だと僕は感じた。これは教育によって子どもたちの積極的に生きること、メンタル的成長を助けるという支援プログラムだが、今回フィリピンで出会った子どもは皆生き生きとしてやる気、特に勉強することに関してのやる気が強かった。高校までしか基本的にCFJでは支援していないため、大学に行くための奨学金を得るために必死に勉強している高校生がいた。自分の興味のあるプログラミングを学び、それを

活かせる仕事に就くために海外を見据えている少年がいた。イロイロで訪れたときに仲良くなったチャイルド4人は、地元の高校の成績優秀者上位だった。日本ではいやいや勉強して、大学もやりたいことがあるわけでも、なりたい職業があるわけでもなく、ただ就活のときに必要な学歴の為だけに大学に通う若者が多い現状と比べると、意欲にあふれているフィリピンのチャイルドを素直に尊敬した。センターでは、「バリューフォーメーション」という子どもにモチベーションを上げたり、堂々とふるまうことを教育しているセンターのスタッフに、どのように子どものやる気を伸ばしてあげているのか尋ねると、「小さい頃は1対1で子どもに向き合うことで自分に目標や意見を持たせて、大きくなったら集団で行動することで、よい意味での競争意識を持ったり、意見交換をすることで互いを認め合うことができるようにさせること」との回答をいただいた。また、子ども一人一人の長所(与えられたもの)を伸ばすという考え方が重要だとも言った。ダスマリニャス地区で、子どもたちがスラムの中に「家庭内暴力はやめよう」という絵を壁に描いていて、積極的に行動していた。この「バリューフォーメーション」によって育った子どもが「住民主体の組織づくり」、「支援からの独立」という最終目標につながっているのではないだろうか。今回、独立した旧センター40を訪問したが、そこは一見小売りのスーパーのようだった。実際の活動は、大量に仕入れることにより安値で生活用品を売ったり、小さな融資(マイクロファイナンス)を行ったり、コミュニティ全体での保険制度の整備などだという。このような地味だが基礎的なところから自立していくことが、コミュニティ全体の貧困によるハイリスクな生活からの脱却につながると今回の訪問を通して確信した。

#### 4. 政府の地域政策

「訪問先について」で具体例を示したように、フィリピン政府としての第一目標は、国民全員の貧困からの脱出や、所得格差の拡大防止などの国民の所得増加ではなく、フィリピンの経済成長という国の所得増加だと僕は考える。この目標のために政府が行っている大きな政策は「海外労働者」と「地域開発」の二つだと僕はこの6日間の滞在を通して感じた。フィリピンの総人口の10%の人が海外に出稼ぎに行っており、それは貴重な外貨の獲得の手段であり、そのおかげで国内の産業が多国籍企業に大多数を占められて貿易赤字に陥っても、海外労働者からの仕送りによってフィリピン経済は黒字となっている。こういう背景があるから、フィリピン政府は優秀な人材を自国の発展のためにとどまらせることを積極的に行っているわけではない。僕がマニラからフィリピンの便で隣の席で話した20歳の男性はイロイロ政府の紹介(プログラム)で、サウジアラビアで石油工学や建築設計関係の仕事に従事していた。彼によると、このプログラムは長期的に海外労働することで高い技術を習得することができるというものであったが、帰国期限ではなく、フィリピンに戻っても賃金の低い仕事しかないため中国や日本、アメリカやカナダなどに就労するケースが多いと聞いた。自国産業がフィリピン人によって発達しないと、国内の市場が多国籍企業に占められるという悪循環が続くことになる。また、住民たちにとってもこの「海外就労者」の弊害は大きい。一つは、労働力の流出によって地元の農業などの生産力が下がることである。これは、都市に人が集中したせいで農業が衰退し、田舎の過疎化が進んだ日本が顕著な例である。もう一つは、親が海外労働者になった場合である。ギマラスで仲良くなった少年は、両親とも島外に出稼ぎに行っていたため祖母の家で暮らしていた。ただ、そのような助け合いがフィリピン全体で行われることはできるだろうか。ギマラスでは、家族やコミュニティのつながりが強いいため、共助の精神が根強

くあった。しかし、もしダスマリニャスなど親類がバラバラになって共助よりも自助が頼りになる地域で親が出稼ぎに行ってしまったらどうなるだろうか。ダスマリニャスのセンターのスタッフの兄は出稼ぎに行ってしまうと、仕送りはしてくれるがそれでも兄弟の面倒を見ることなど姉である彼女の生活は大変になったそうだ。こんな家庭が比較的フィリピンで増えてきているにもかかわらず、そのような世帯に公助で支援するような政策をフィリピンは具体的には行ってはいない。その他の弊害として、最近医者や看護婦になるために、その自国市場を開放しているアメリカやイギリスに海外就労するケースが増えており、実際に聞いてみても将来の夢に医師になるといったものを持った若者は多かった。また、おかしなことにフィリピンの医師が賃金目当てに海外で看護師の資格を取って就労することもあったという。これは優秀な人材の流出だけではなく、フィリピンの医療水準の低下にもつながると考えることができる。医師に限らず、技術職などの人材を国内にとどめるために、例えば国産企業を政府が援助することで賃金の良い仕事を国内に増やすなどの政策をフィリピン政府はすべきだろう。

もう一つの大きなフィリピンの大きな政策といえるのが「地域開発」だ。前述したように、イロイロ、ギマラス、マニラの急激な開発計画から追い出されたダスマリニャスのように、フィリピンのいたるところで政府と多国籍企業で連携した地域開発が進んでいる。元からあった生活、文化、風習や自然の破壊などそのダメージは大きいだろう。しかし、その開発が住民にとって悪いことだけか、といわれたら僕はそうは思わない。確かにその政策は、政府からしたら観光客や留学生など外国人の誘致を目的としたものだとしても、住民にとって収入増加のチャンスとなりうるからだ。幸せな貧農生活であっても、そこには多くのリスクが伴う。その状態を彼ら自身で打開することは難しいと今回様々なところを訪問して感じた。ギマラスに橋が架かる件に関しても、もちろん元の生活を守るために反対する人も多いだろうが、新しいチャンスやきっかけを求める賛成派の人も少なからず出てくるだろう。ただ、ギマラスの少年たちは新しく橋が架かることについて、僕が言うまで知らなかった。住民たちの中で十分な議論が行われないうまま開発が進んでいくのは、後々多くの問題が出てくると思う。また、地域開発は極めて限定的な資本の集中投下だった。実際、ダスマリニャスの上下水道や病院などのインフラ整備は、州政府からも見捨てられていた。ある地域だけが優先されるあまり、他の地域の地盤づくりがおろそかになってはいけないうし、資本を投下したところを中心として周りの地域が円を描くようにどんどん豊かになっていく、そのような開発事業を政府はしなくてはならないと思った。

## 5、国民一人一人の幸せのために

ここまで読んで気づいた人も多いように政府もセンターも国のため、住民のためと活動目的に相違があっても、どちらも「フィリピン」のために活動している。そして、政府がフィリピンというものを換えようとしているのに対して、センターはフィリピンというものを維持しようとしていると今回の訪問を通じて強く感じた。今回の訪問で引率してくださった藤本先生は、それを「Hot society」と「Cold society」という言葉で表現してくれた。題名にもなっている「大きな政府と小さなセンターのどちらが住民のためになっているのか」という問いの答えは、住民が現状を変えたがっているか、変えたがっていないかによって決まるのだ。住民の中にフィリピンが、その地域が、その生活が変わることに賛否あることはこれまで述べてきたが、僕はそれでもフィリピンが変わっていく方向にむかいたがっていると感じた。その理由は、今回出会った多くのやる気に満ちた若者が口々に「try」

という言葉で将来の夢を語る時に用いて、変わりゆくだろう未来のフィリピンに怯んでいなかったからだ。そんな自信に満ち溢れた子どもたちが、将来多くの壁に当たって挫折しかけても、いつかその自信を確信に変えていけるよう手伝うこと、またそんな環境を作ることが政府とセンターに課せられたミッションだと思う。今日も地球上でどんどんグローバル化が進んでいて、それは将来的にフィリピンにもアマゾンの奥地にも、アフリカの密林の果てでさえその波は及ぶだろう。その時に、自分たちがその波に乗ろうが、逆にそれから自分たちの地域を守るにしても、それに対抗する手段や最新の知識、常識は必要だ。前章でも述べたように、政府はそのためのきっかけを「開発」と「経済発展」という形で作り出している。それと同じように我々の支援によって活動しているセンターや他の NGO 団体も、外部からの力を受けて住民に対して現状を変えるきっかけづくりをしているのではないだろうか。本当の幸せを住民にもたらすことは、きっと政府にもセンターにも支援している私たちにはできないと思う。なぜなら、幸せは本人がつまり住民たち自身しかその手でつかむことができなからだ。ぼくたちが良かれと思って行う支援も、彼らが望んでいるものでなかったら、それは押し付け支援となってしまう、彼らの幸せにはつながらない。幸せになりたい人が誰でも幸せになれるようにする、そのような世界を実現するには、小さなセンターが子どもたちと密接な活動を通して、幸せを追求しようという心、意思を育て、大きな政府が住民や若者が本当にしたいこと（仕事）をその地域（フィリピン国内）でできるように環境を整備すること、その分担作業が今のフィリピンには必要だと思う。いわば、センターが子どもたちの芽が出るように土を耕し、政府が国民一人一人の花が咲くようにその芽に太陽の光を与え、雨を降らせる。そのようなプロセスが今のフィリピンに必要なのだ。だから、まずは行政とセンターの連携強化が不可欠である。私たちは、彼らの幸せ自体を作り出せなくても、そんな環境を作る手伝いはできる。今回の訪問において、私たちは訪問先の市長と交流する機会があった。その訪問一つが、「日本に貧しい人たちを支援し、ともに歩んでいる人がいる」ということを意味し、行政とセンターのパイプ作りに一役買っているのだ。このようなエンパワーメント＝力を与えることは、私たちがフィリピンの子どもたちにしてあげられる多くのことのうちのひとつだ。経済的にフィリピンの子どもを支援すること、それは私たちのできることの中で一番役に立つことなのかもしれない。しかし、まずは貧困という環境に置かれている人がいて、そんな中でも懸命に生きている人がいる、ということを知っておかなければいけないと思う。そのうえで、彼らを理解し共に未来を創っていく。それが私達の本来の支援の在り方なのではないだろうか。

僕は、この五泊六日の経験を決して忘れない。そして、フィリピンがどう変わっていくかをずっと見守り、間違った方向に向かっていったらそれを指摘し、最終的にはお互いを助け合える関係になればいいと思う。それは簡単なことではないが、不可能なことではない。今回の訪問の中で、多くのフィリピンの友達と心を通わせることが出来たからだ。